



日本看護研究学会中国・四国地方会
Japan Society of Nursing Research

第30回学術集会抄録集

実践との共同で推進する
看護学研究における
グローバル化

日時：平成29年3月19日(日) 9:00～15:30 (8:30開場)

会場：岡山コンベンションセンター

〒700-0024 岡山県岡山市北区駅元町14-1

日本看護研究学会中国・四国地方会
Japan Society of Nursing Research

第30回学術集会抄録集

実践との共同で推進する
看護学研究における
グローバル化

会期：平成29年3月19日（日）

会場：岡山コンベンションセンター

目 次

ご案内

ご挨拶	3
会場への交通案内	4
会場案内図	5
学術集会に参加される方へのご案内	6
座長・演者へのご案内	8
日程表	10
プログラム	11

抄 録

日本看護研究学会中国・四国地方会設立30周年記念講演	18
特別講演	20
シンポジウム	22
グローバル化特別セッション	24
一般演題(口演)	28
一般演題(示説)	38

ご挨拶

一般社団法人日本看護研究学会
中国・四国地方会第30回学術集会
実行委員長 深井 喜代子
(岡山大学大学院保健学研究科)

日本看護研究学会中国・四国地方会は今年3月に30周年を迎えます。その記念すべき年の学術集会を岡山で開催させていただくことは大変光栄でありますとともに、身が引き締まる心地がいたします。第30回学術集会で実行委員長を仰せつかった私どもは、実は去る平成10年(1998年)3月に第11回学術集会を担当しておりまして、第30回は2度目になります。当時を思い、また今日までの変遷を振り返りますと、我が国の看護学研究の発展の縮図を見るようで、感慨もひとしおであります。他の学問分野から看護学の門を叩いた不慣れな小職をいち早く招き入れ、育ててくださったのは他ならぬ日本看護研究学会であり、この地方会であったからです。

近年、看護学教育の大学化が急速に進む中で、看護における研究も大きな進歩を遂げつつあります。その証拠に、我が国の看護学領域の年間の原著論文数は、過去20年余の間に数百本から数千本に増えました。これは看護学研究者の数の増加だけでなく、彼らの意識の変化を反映しているといえるでしょう。既成の学問と肩を並べるまでになるにはまだ道は遠いですが、ライフワークを持つ看護学研究者の数が確実に増えていることが推察されるのです。

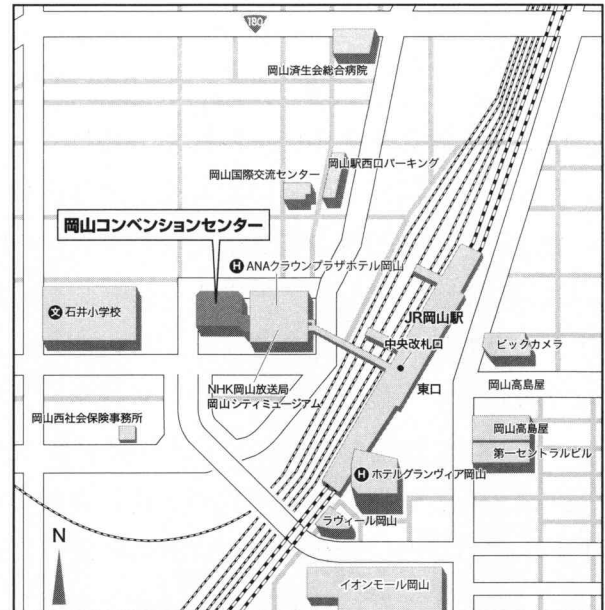
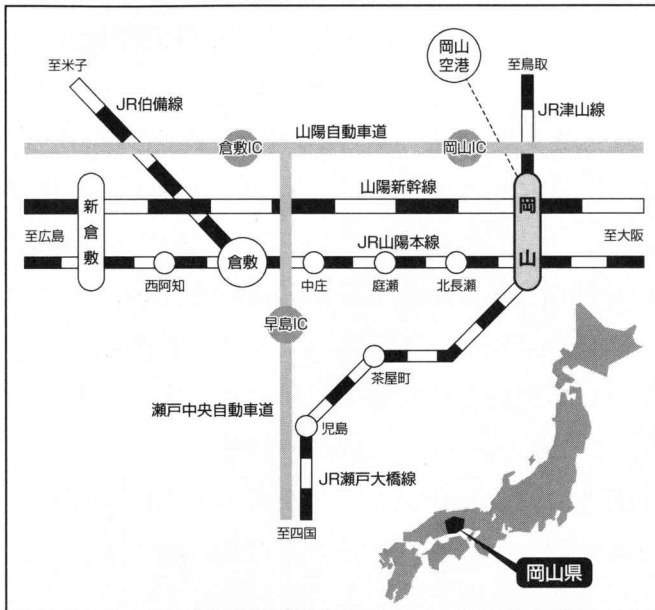
今回、私どもが学術集会のテーマに掲げた「看護学研究におけるグローバリゼーション」は、看護学が既成の学問により近づくためのスローガンと捉えていただければ幸甚です。看護学という実践科学に於いて言語が壁となるべきではないこと、同時に時代が求める看護実践に職種間の関門があるべきではないことは、看護と看護学の発展を願う全ての看護者が承知していることでしょう。私どもは皆様とともに第30回地方会を、そうした課題に向き合う場としたいと思います。多数の方のご参加をここからお待ちしております。どうか会員・非会員を問わず看護に関心をお持ちの皆様、岡山の地にご参集くださいますようお願いいたします。

会場への交通案内

会場 岡山コンベンションセンター (ママカリフォーラム)

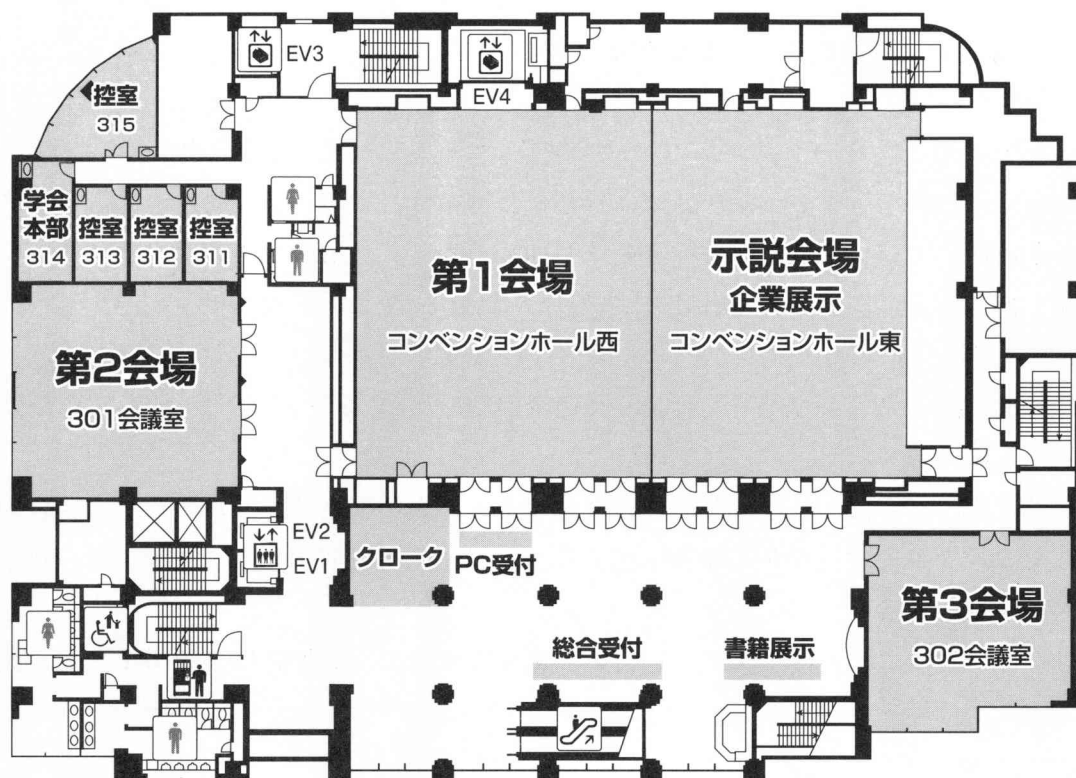
〒700-0024 岡山市北区駅元町14番1号

TEL:086-214-1000 FAX:086-214-3600 <http://www.mamakari.net/>



会場案内図

3rd Floor



学術集会に参加される方へのご案内

1. 総合受付

3階 ホワイエ

参加受付、講演者・発表者受付等を8:30から行います。

【事前登録の方】

- ・事前に参加費をご入金いただいた方には参加証(ネームカード)と領収書を、ご登録いただいた住所宛に送付いたします。参加証は当日必ずお持ちください。参加受付のあるフロアーにホルダーを置いてありますので、会場内では参加証を必ずご着用ください。
- ・参加証を当日お忘れになられた方は、「事前登録者受付」でお問い合わせください。

【当日参加の方】

- ・「当日参加受付」にて、参加費〈教育職・研究職6,000円、看護職4,000円、学生2,000円〉をお支払いください。
- ・学生は学生証の提示により確認させていただきます。大学院生は、フルタイムの場合のみ学生となります。なお、参加学生で事前・当日参加に関わらず必要な方は、抄録集(2,000円)を購入してください。
- ・参加受付のあるフロアーにホルダーを置いてありますので、参加証に必要事項を記入後はホルダーに入れ、会場内では必ずご着用ください。

2. 昼食および飲食について

- ・お弁当の販売はいたしません。会場および岡山駅周辺の飲食店をご利用ください。
- ・会場内は飲食可能ですが、1階および2階ロビーではご遠慮くださるようお願いいたします。

3. 企業展示について

- ・企業展示は3階 ホワイエ(9:00~15:30)にて行います。是非お立ち寄りください。

4. 総会

- ・3月19日(日) 11:30~12:00 3階 コンベンションホール(第1会場)で開催いたします。会員の方はご出席ください。

5. 中国・四国地方会運営委員会および学術委員会

- ・別途案内のとおり、運営委員会を3月18日(土) 15:30~16:00に行います(会場：岡山コンベンションセンター 406会議室)。運営委員会に引き続き、学術委員会を行います。関係者の方はご出席ください。

6. 災害発生時の避難

- ・災害発生時は各会場の避難アナウンスに従い、冷静に行動してください。
- ・避難の際、エレベーターは使用しないでください。

7. その他

- ・クロークは受付と同じ3階 ホワイエに設置します(利用時間8:30～16:00)。貴重品のお預かりはできません。
- ・会場内での忘れ物や落し物は、総合案内までお持ちください。学術集会終了時まで総合案内でお預かりし、お引き取りがない場合は処分させていただきますのでご了承ください。
- ・会場内での呼び出しは行いません。総合受付に伝言板をご用意しますので、各自でご利用ください。
- ・会場内は、所定の場所以外は禁煙となっております。
- ・会場内では携帯電話・スマートフォンはマナーモードに設定するか、電源を切り、周りの方の迷惑にならないようにご配慮ください。
- ・本学術集会会場内すべてのプログラムを許可なく撮影・録音することは固くお断りします。

プレカンファレンスセミナーのご案内

学術委員会企画のプレカンファレンスセミナーを学術集会前日に行います。

テーマ：「学術論文を英語で書くということ」

講師：グレッグ美鈴 教授(日本看護科学学会英文誌・副編集長, 神戸市看護大学看護学部)

○日時 平成29年3月18日(土) 14:00～17:30

○場所 岡山コンベンションセンター 3階 301

○参加費 3,000円

○定員 100名(定員になり次第, 締め切らせていただきます)

○参加資格 会員・非会員を問いません。

○申込方法 当日参加も可能です。

懇親会のご案内

学術集会前日のプレカンファレンスセミナー後に、懇親会を開催いたします。

○日時 平成29年3月18日(土) 18:00～20:00

○場所 岡山コンベンションセンター 2階 展示ホール

○参加費 5,000円

会員・非会員問わずどなたでもご参加いただけます。

○申込方法 当日参加も可能です。

座長・演者へのご案内

1. 一般演題(口演)の座長の方へ

- ・ご担当の演題群開始30分前までに、座長受付(3階 ホワイエに設置)にて受付をお済ませください。ご担当の演題群開始10分前までに、会場内の座長席でお待ちください。
- ・開始時刻になりましたら進行を進めてください。
- ・発表時間は10分、質疑応答5分です。1演題が15分以内に終了するように、また、ご担当の演題群が予定時間に終了するように進行してください。
- ・演者が欠席の場合は、次の演題を繰り上げて進行してください。

2. 一般演題発表

【口演発表者】

1) スライドの作成について

- ・事務局で準備するパソコンは、OSはWindows 7、アプリケーションはPowerPoint 2007, 2010, 2013であり、2016は対応しておりません。なお、動画のある場合およびMacintoshで作成した場合は、ご自身のパソコンをお持ちいただくようお願いいたします。
- ・ご発表の際に使用されるデータは、各自がウイルスチェックを済ませ、USBメモリに保存してご持参ください。

2) 発表者の受付

- ・口演発表者(筆頭者)の方は、PCセンター(3階 ホワイエ 総合受付近く)で、該当の演題開始30分前までに受付を済ませてください。その際、発表用スライドのUSBメモリをお持ちください。パソコンにデータをコピーした後、ご自身で試写状況やパソコン操作を確認してください。
- ・ご発表群の開始時間10分前までに、発表会場にお越しください。
- ・直前の演題の発表が始まりましたら、会場前方の次演者席にご着席の上待機してください。

3) 発表形態

- ・演題の発表は、全てパソコンで行います。パソコンの操作は、発表者自身で行ってください。
- ・レーザーポインターは事務局で準備します。

4) 発表時間など

- ・一般演題(口演)の発表時間は10分、質疑応答5分です。発表時間を厳守してください。発表時間経過は、演台上の黄色ランプ(発表終了1分前に点灯)と赤ランプ(発表終了時間の10分で点灯)でお知らせします。その他、プログラムの進行につきましては、座長の指示に従ってください。
- ・ご発表の際にコピーさせていただきましたデータは、学術集会終了後、事務局にて責任を持って消去いたします。

【示説発表者】

1) ポスター作成要領について

- ・パネル上でポスターが貼れる範囲は、縦180cm×横90cmです(A3サイズ10枚程度の掲示可能)。パネルの左上20cm×20cmの部分は、事務局で演題番号を貼付しますので、それを考慮してポスターを作成してください。画鋏は事務局で準備します。

2) 発表者の受付

- ・示説発表者の方は、示説会場入り口の受付で、画鋏を受け取ってください。画鋏の受け取りをもって示説発表者の受付完了とします。

3) ポスターの掲示と撤去

- ・示説発表者の方は、直接ポスター会場へお越しいただき、ご自身で貼り付けをお願いします。
- ・ポスターの貼付・撤去時間は以下の通りです。

ポスター会場：3階 コンベンションホール(東側)

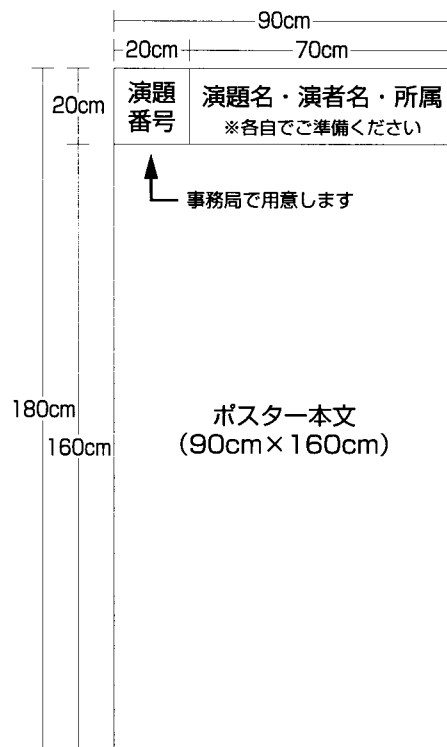
貼付 8:30～9:30 撤去 15:00～15:30

- ・指定時間帯に撤去されないポスターは事務局で撤去、廃棄いたしますのでご了承ください。
- ・使用後の画鋏は、係員にご返却ください。

4) 示説討論について

- ・示説は一定時間を設け、討論のみとします。座長はおかず、発表者を中心にポスターを囲んで自由に討論していただきます。示説会場に多数ご参集いただき、活発な討論をお願いいたします。
- ・発表者の方は、討論時間にはポスター前に必ず待機してください。発表者は、その群の終了時間まで、参加者と自由に討論を行ってください。
- ・当日、ポスターを掲示しない、あるいは発表時間に発表者が不在の場合は、本学術集会での発表は取り消しとなりますのでご注意ください。

示説討論時間 12:30～13:30



日程表

	第1会場 3階 コンベンションホール西	第2会場 3階 301会議室	第3会場 3階 302会議室	示説会場 3階 コンベンションホール東
9:00	8:55~9:00 開会式 9:00~9:50 日本看護研究学会中国・四国 地方会設立30周年記念講演 「30年の軌跡の上に看護に 於ける研究の未来を展望する」 講師：深井喜代子／中西純子 司会：内田宏美			8:30~9:30 ポスター貼付
10:00	10:00~11:20 特別講演 「国際看護と看護研究」 講師：近藤麻理 司会：深井喜代子			第1会場サテライト ポスター展示
11:00	11:30~12:00 総会			
12:00				
13:00	12:50~14:20 シンポジウム 「周手術期管理の グローバル化」 講師：森田理恵 猪田宏美 山中玲子 園井みか 高橋徹 司会：足羽孝子	13:20~14:20 口演1群 看護教育 (O-01~O-04) 座長：秋元典子	13:20~14:20 口演2群 看護実践，看護教育 (O-05~O-08) 座長：中西純子	12:30~13:30 示説討論 (P-01~P-29)
14:00				第1会場サテライト ポスター展示
15:00	14:30~15:30 グローバル化 特別セッション 講師：澁谷徳子 原田延枝 Mi Mi Thet Mon Win 司会：深井喜代子	14:30~15:30 口演3群 看護管理，看護実践 (O-09~O-12) 座長：西田真寿美	14:30~15:15 口演4群 看護実践 (O-13~O-15) 座長：祖父江育子	
	15:30~ 閉会式			15:00~15:30 ポスター撤去

プログラム

日本看護研究学会中国・四国地方会 設立30周年記念講演

9:00～9:50

第1会場(3階 コンベンションホール西)

司会：内田 宏美（島根大学医学部看護学科）

「30年の軌跡の上に看護に於ける研究の未来を展望する」

深井 喜代子（岡山大学大学院保健学研究科）

中西 純子（愛媛県立医療技術大学）

特別講演

10:00～11:20

第1会場(3階 コンベンションホール西)

司会：深井 喜代子（岡山大学大学院保健学研究科）

「国際看護と看護研究」

近藤 麻理（東邦大学看護学部）

シンポジウム

12:50～14:20

第1会場(3階 コンベンションホール西)

司会：足羽 孝子（岡山大学病院周術期管理センター）

「周手術期管理のグローバル化」

森田 理恵（鳥取大学医学部附属病院手術部・材料部）

猪田 宏美（岡山大学病院薬剤部）

山中 玲子（岡山大学病院医療支援歯科治療部）

園井 みか（岡山大学病院周術期管理センター）

高橋 徹（岡山県立大学）

グローバル化特別セッション

14:30～15:30

第1会場(3階 コンベンションホール西)

司会：深井 喜代子（岡山大学大学院保健学研究科）

「看護の原点 重症心身障害児(者) 看護のグローバル化への課題」

澁谷 徳子（社会福祉法人旭川荘旭川荘療育・医療センター旭川児童院）

「岡山大学病院看護部におけるグローバル化の取り組み」

原田 延枝（岡山大学病院看護部）

「A Campus Life in Japan as an International Student from Myanmar」

Mi Mi Thet Mon Win (Doctoral Student, Graduate School of Health Sciences,
Okayama University)

口演1群：看護教育

座長：秋元 典子（岡山大学大学院保健学研究科）

O-01 日常生活における在宅酸素療法疑似体験の学習効果－テキストマイニングによる分析－

○三木 佳子, 内海 知子, 岩本 真紀, 岡西 幸恵, 諏訪 亜季子
香川県立保健医療大学保健医療学部看護学科

O-02 成人看護学実習における学生のルーブリックの活用現状

○鈴木 香苗¹⁾, 中信 利恵子¹⁾, 松本 由恵¹⁾, 岡田 淳子²⁾, 横山 奈未¹⁾,
山下 彰子¹⁾, 植田 喜久子¹⁾
日本赤十字広島看護大学看護学部¹⁾
県立広島大学保健福祉学部看護学科²⁾

O-03 子育て支援活動における「災害への備え教育」実施前後の行動化や意識の変化

○古場 真理, 安成 智子
宇部フロンティア大学人間健康学部看護学科

O-04 当事者参加授業における学習効果について－母性看護学Ⅱの授業に関して－

○古場 真理, 安成 智子
宇部フロンティア大学人間健康学部看護学科

口演2群：看護実践，看護教育

座長：中西 純子（愛媛県立医療技術大学保健科学部看護学科）

O-05 プロバイオティクスタブレット投与による成人女性の便秘および便臭の改善の評価

○笹岡 晴香¹⁾, 吾妻 健²⁾
高知大学医学部附属病院看護部¹⁾
高知大学教育研究部医療学系環境医学²⁾

O-06 訪問看護師が在宅高齢療養者に内服支援を行う看護プロセス (第1報)

○坂根 可奈子, 福岡 美紀, 津本 優子, 宮本 まゆみ, 内田 宏美
島根大学医学部基礎看護学講座

O-07 終末期在宅療養者を支える高齢介護者の訪問看護師に対する役割期待

○杉本 由起子¹⁾, 河野 保子²⁾, 讃井 真理²⁾
訪問看護AOIケアリングステーション¹⁾
広島文化学園大学大学院看護学研究科²⁾

O-08 看護学教育のグローバル化の試み－海外看護学短期研修の構築と単位化－

○池田 理恵, 高橋 幸子, 山口 三重子, 井上 幸子
岡山県立大学保健福祉学部看護学科

□演3群：看護管理，看護実践

座長：西田 真寿美（岡山大学大学院保健学研究科）

○-09 慢性肝炎から肝細胞がんに至った患者のスピリチュアリティの様相

○世羅 めぐみ¹⁾，井上 裕美子¹⁾，近藤 真紀子²⁾
岡山大学病院¹⁾
岡山大学大学院保健学研究科²⁾

○-10 看護師の看護補助者への業務の委譲についての研究

○吉川 あゆみ，斎藤 信也
岡山大学大学院保健学研究科

○-11 テキストマイニングを用いた在宅看護研究の動向

○菊地 よしこ¹⁾，谷垣 静子²⁾
山陽学園大学看護学部看護学科¹⁾
岡山大学大学院保健学研究科²⁾

○-12 介護者の経時的変化に着目した研究の動向

○武田 留美子
広島都市学園大学健康科学部看護学科

□演4群：看護実践

座長：祖父江 育子（広島大学大学院医歯薬保健学研究科）

○-13 耳鼻咽喉科・頭頸部外科がん患者における質問促進パンフレットの有効性

○川本 萌子，荻田 理枝，細川 祥恵
鳥取大学医学部附属病院

○-14 パシーマ[®]パットシーツの乳児の寝床内気候と睡眠への影響

○池田 理恵¹⁾，深井 喜代子²⁾，関 明穂²⁾
岡山県立大学保健福祉学部看護学科¹⁾
岡山大学大学院保健学研究科²⁾

○-15 治験コーディネーターの治験実施過程における現状と課題

○井上 弘子，塩見 和子
新見公立大学看護学部看護学科

P-01 日本看護研究学会中国・四国地方会の学会発表の動向(その1)

○福岡 美紀¹⁾, 津本 優子¹⁾, 宮本 まゆみ¹⁾, 坂根 可奈子¹⁾, 河良 香澄²⁾,
内田 宏美¹⁾
島根大学医学部基礎看護学講座¹⁾
島根大学医学系研究科看護学専攻²⁾

P-02 日本看護研究学会中国・四国地方会学術集会発表演題の動向(その2)

○津本 優子¹⁾, 福岡 美紀¹⁾, 宮本 まゆみ¹⁾, 坂根 可奈子¹⁾, 石倉 綾華²⁾,
内田 宏美¹⁾
島根大学医学部看護学科¹⁾
島根大学医学部大学院医学系研究科看護学専攻²⁾

P-03 看護職の育児休業取得者に関する研究の動向と課題

○梶谷 麻由子
島根県立大学看護学部

P-04 臨床看護師のリフレクション能力と関連要因に関する研究

○高橋 亜希, 岩佐 幸恵
徳島大学大学院医歯薬学研究部保健科学部門看護学講座

P-05 看護師の自尊心が認知と気分に与える影響－認知行動理論を用いて－

○江口 実希¹⁾, 國方 弘子²⁾
四国大学看護学部看護学科¹⁾
香川県立保健医療大学保健医療学部看護学科²⁾

P-06 A大学看護学部3年生がキャリア形成のために求めている支援

○塩見 和子, 上山 和子
新見公立大学看護学部看護学科

P-07 看護大学生の進路選択動機への影響要因～学部4年生の調査から～

○上山 和子¹⁾, 古城 幸子²⁾, 塩見 和子¹⁾, 多田 めぐみ¹⁾, 井上 弘子¹⁾
新見公立大学看護学部看護学科¹⁾
吉備国際大学保健医療福祉学部看護学科²⁾

P-08 小児看護学実習における学生の学び－実習施設による違い－

○岡 和子¹⁾, 安福 真弓²⁾
福山平成大学看護学部看護学科¹⁾
吉備国際大学保健医療福祉学部看護学科²⁾

P-09 海外の看護学領域における成人教育・成人学習の動向

○岡安 誠子, 川瀬 淑子, 平井 由佳
島根県立大学看護学部

P-10 基礎看護教育における実習用ポートフォリオ導入の試み

○榊本 朋子, 影本 妙子, 池原 麗子
川崎医療短期大学看護科

- P-11 看護系大学教員の臨地実習指導能力に関する文献検討
○廣川 恵子, 細川 京子
川崎医療福祉大学医療福祉学部保健看護学科
- P-12 看護系大学新人教員の臨地実習指導の特徴に関する文献検討
○細川 京子, 廣川 恵子
川崎医療福祉大学医療福祉学部保健看護学科
- P-13 大学における非医療系学生と医療系学生の喫煙行動の実態と関連する要因
○富澤 栄子, 江口 実希, 橋本 茂, 奥田 泰子
四国大学看護学部
- P-14 モーションセンサを用いた離床兆候キャッチ・システムの開発
○宮本 まゆみ, 坂根 可奈子, 福間 美紀, 津本 優子, 内田 宏美
島根大学医学部看護学科
- P-15 空気圧式末梢循環促進装置を用いたマッサージの評価に有用な指標の検討
○宇都宮 愛¹⁾, 田村 瑠美¹⁾, 長尾 衣莉¹⁾, 森本 美智子²⁾
岡山大学病院¹⁾
岡山大学大学院保健学研究科²⁾
- P-16 体重管理困難な透析患者の行動変容に向けた看護ートラベルビー看護論を用いて
○河良 香澄¹⁾, 福間 美紀²⁾, 宮本 まゆみ²⁾, 小林 裕太²⁾
島根大学医学系研究科看護学専攻¹⁾
島根大学医学部基礎看護学講座²⁾
- P-17 我が国におけるクリティカルな状況にある患者の家族ニーズに関する文献検討
○大西 敏美, 市原 多香子
香川大学医学部看護学科
- P-18 脊髄損傷患者の自己導尿に対する看護に関する文献検討
○深堀 美紀子
広島都市学園大学健康科学部看護学科
- P-19 慢性疾患セルフケアマネジメントプログラムのアクションプラン効果発現メカニズムの検討
○小野 美穂
岡山大学大学院保健学研究科
- P-20 集学的治療を受ける乳がん患者の生活の再構築に関する文献検討
○中垣 和子, 黒田 寿美恵, 船橋 眞子
県立広島大学保健福祉学部看護学科
- P-21 高齢透析患者が看護師に望むスピリチュアルケア
○小薮 智子¹⁾, 竹田 恵子¹⁾, 白岩 千恵子¹⁾, 實金 栄²⁾, 井上 かおり²⁾
川崎医療福祉大学医療福祉学部保健看護学科¹⁾
岡山県立大学保健福祉学部看護学科²⁾

- P-22 主な療養施設における看護職員の認知症高齢者に対する転倒予防の過程
○小田 亜希子¹⁾, 小林 幸恵¹⁾, 福間 美紀²⁾
西九州大学地域看護研究研修センター¹⁾
島根大学医学部看護学科²⁾
- P-23 高齢者の喪失の受容過程について
○中木 里実
関西国際大学保健医療学部看護学科
- P-24 自治体が実施する夜間運動教室の参加者特性と参加状況, 参加効果からみた評価
○小島 千明, 高嶋 伸子
香川県立保健医療大学保健医療学部看護学科
- P-25 在宅における老老介護を行っている主介護者の心理的側面とストレス対処能力との関連
○二宮 寿美¹⁾, 小林 敏生²⁾
宇部フロンティア大学人間健康学部看護学科¹⁾
広島大学大学院医歯薬保健学研究院²⁾
- P-26 高校生のレジリエンスと怒りに対する対処行動の因果の方向性の検討
○石田 実知子¹⁾, 國方 弘子²⁾
岡山県立大学保健福祉学部看護学科¹⁾
香川県立保健医療大学保健医療学部看護学科²⁾
- P-27 高校生のレジリエンスを媒介した対人ストレス・怒りに対する対処行動及び精神的健康の関連
○石田 実知子¹⁾, 國方 弘子²⁾
岡山県立大学保健福祉学部看護学科¹⁾
香川県立保健医療大学保健医療学部看護学科²⁾
- P-28 リフレッシュを目的としたイベントに参加した母親の育児ストレスの変化
○横関 恵美子, 小川 佳代, 高橋 順子
四国大学看護学部
- P-29 熟練訪問看護師が医療的ケア児に行う入浴介助に関する経験知
○枝川 千鶴子, 豊田 ゆかり
愛媛県立医療技術大学保健科学部看護学科

日本看護研究学会中国・四国地方会 設立30周年記念講演

「30年の軌跡の上に看護に於ける研究の未来を展望する」

講師：深井 喜代子 教授（岡山大学大学院保健学研究科）

中西 純子 教授（愛媛県立医療技術大学保健科学部看護学科）

30年の軌跡の上に看護に於ける研究の未来を展望する

深井 喜代子

岡山大学大学院保健学研究科

日本看護研究学会に入会させていただいて27年になります。看護学研究者のお仲間に入れていただく以前、私どもは神経生理学者でした。高知女子大学で看護学を学び、東海大学病院で看護職を勤めたのち、1993年度から看護学領域で教育と研究に携わる身となりました。動物実験を行って、電気生理学的手法を用いて中枢神経系のメカニズムを解析する生理学と、「個性ある、生活し、痛みや苦痛、健康問題を抱える人間」に焦点を充てる看護学との間には実に大きな隔たりがありましたが、日本看護研究学会には、そのような背景の私どもを抵抗なく受け入れる大きな器があったように思います。その意味で、この学会はすでに学問としての自立性を備えていたのかもしれませんが、そして、私どもにとってこの学会がさらに馴染みやすかったのには、「地方会を持っている」という、既成の学問領域の老舗学会の象徴的な特徴があったことも原因していたと思います。入会後は看護学教育の怒濤のような大学化が進み、学会(学術団体)が何倍にも何十倍にも増えましたが、「地方会」を持つ看護学系の学術団体は今なお希有なのであります。

会員となって数年、まだ痛み関連の基礎研究の成果を発表したばかりの私どもは、看護学の歴史も、大系も、教育すらもよく分かっていない未熟な存在でしたが、複雑な要素の塊で、真理を探究することがすこぶる困難なヒトを対象とした研究に大きな可能性があるように思えました。つまり、看護と看護学研究はこの先、めざましい進化・発展を遂げる領域(研究シーズの宝庫)だと予感したのです。

私どもが入会した当初は、まだ近畿・北陸／中国・四国の名を冠した地方会で、野島良子先生や近田敬子先生のようなカリスマ的存在が親学会の理事を務められ、地方会をリードしてくださいました。地方会とは言え、私のような若輩者に学術集會を託されたことから分かるように、当時の地方会には若手を育てよう、伸ばそうという気運の高まりが感じられました。特に役員会(当時は世話人会と呼んでいました)には伝統的な団結性があり、家族のような全員体制で地方会活動・学術集會が運営されていました。

1998年に第11回地方会を仰せつかり、19年後の今年、第30回地方会は自らの意思で主催させていただいております。地方会会員の皆様、そして看護の実践・教育・研究に携わるすべての方々、さらには看護の発展に関心と期待をお寄せくださる皆様とともに、地方会のこれからのあり方、さらには「地方会」からみた我が国の看護学研究のこれからの、しばし想いを巡らすことに致そうではありませんか。我が日本看護研究学会中国・四国地方会に感謝の意を捧げさせていただくとともに、本地方会のさらなる発展を願ってやみません。

【日本看護研究学会会員歴】

1990年(平成2年)3月	入会
1998年(平成10年)3月29日	日本看護研究学会近畿・北陸／中国・四国地方会 第11回学術集會 実行委員長
2001(平成13年)4月～2007(平成19年)3月	理事・地方会運営委員長(2期) ~~~~~
2004年(平成16年)3月～	日本看護研究学会中国・四国地方会へ ~~~~~
2010(平成22年)8月～2014(平成26年)8月	理事(2期)
2017年(平成29年)3月19日	日本看護研究学会中国・四国地方会 第30回学術集會 実行委員長

・ 親学会 巨大化

・ 会費と自己満足は?

・ 他学会 〃

・ 地方会に魅力を感じてほしい

顔か目の子

おれにゃいっ

昔年を懐かし

特別講演

「国際看護と看護研究」

講師：近藤 麻理 教授（東邦大学看護学部）

国際看護と看護研究

近藤 麻理

東邦大学看護学部

現在、グローバル化が急速に進む中で、グローバル人材の育成を高等教育機関が担うことが求められています。そして、看護の研究者も次世代の教育とともに、国際的研究と積極的な共同研究の推進が期待されるようになりました。しかし、教育や研究の中で使われる“グローバル化”という言葉については、十分な注意が必要であろうと思うのです。ですから、世界から舞い込んで来る共同研究のすべてを、純粋に歓迎することは賛成しかねるといわざるを得ません。

特に安全保障と学術について考えるとき、日本にいれば私たちは平和に暮らしていると思っている人々にとって、「戦争やテロは、遠い国や地域の話」に過ぎないのかもしれませんが。私たち研究者は、世界や社会状況を正しく理解し、自分の研究や行動をどう推進すべきかをしっかり考えなければ、いつの間にか自分の研究が戦争に加担する役割を担っていた、ということにもなりかねない時代を生きているのです。

この講演では、看護と研究のグローバル化の時代に、研究者として私たちに突きつけられている問いは何なのか、一緒に考えていただければと思います。

プロフィール

昭和60年3月 川崎医療短期大学第一看護科 卒業
昭和63年3月 和光大学人間関係学部教育学専攻 卒業
平成11年5月 タイ国マヒドン大学 Master of Primary Health Care Management 修了
平成13年4月 兵庫県立大学看護学部附置研究所推進センター 国際地域看護 講師
平成17年3月 兵庫県立看護大学看護学研究科博士後期課程 国際地域看護学 修了
平成17年4月 岡山大学大学院保健学研究科 准教授
平成22年4月 東邦大学看護学部 国際保健看護学研究室 教授

シンポジウム

「周術期管理のグローバル化」

講師：森田 理恵（鳥取大学医学部附属病院手術部・材料部）

猪田 宏美（岡山大学病院薬剤部）

山中 玲子（岡山大学病院医療支援歯科治療部）

園井 みか（岡山大学病院周術期管理センター）

高橋 徹（岡山県立大学）

司会：足羽 孝子（岡山大学病院周術期管理センター）

人間と安全の保障
human security
足羽 孝子

周手術期管理のグローバル化

足羽 孝子

岡山大学病院周術期管理センター

看護の世界では古くから、「周術期・周手術期看護」という言葉を用いて、術前の手術療法選択から在宅での生活を見据えた術後までの一連のプロセスを継続して行う看護ケアが提唱されてきた。しかし、近年の外来機能の細分化や医療費削減の政策による入院期間の短縮などにより、周術期の看護ケアが希薄になっていることは否めず、現行では、外科医を軸として術前準備や術式の選定、術後管理が行われている。進化する医療技術によりハイリスク手術が可能となり、患者の高齢化や国民の多様な価値観を考慮すると、多忙な外科医のみで周術期管理をマネジメントすることは限界にきている。そのため、手術までに「禁煙ができていない」「体重（栄養）や血糖コントロールができていない」「入院後に抗凝固剤の内服が発覚し手術が延期になる」などの問題がおこっている。

こうした、周術期管理の問題を解決すべく、最近では、術前の外来時点から手術を受ける患者の術後QOL向上を目指した多職種による周術期チーム医療の取り組みが注目を浴びている。

今回のテーマ『グローバル化』とは「世界的」と訳される他に、「全体的・包括的」という意味もある。このシンポジウムでは、我が国における周術期管理を広く俯瞰し、次にあげる各分野のシンポジストの方から最近の周術期管理についての知見を発表いただき、今後求められる周術期管理についてディスカッションが出来ればと考えている。

「手術室看護師としての見知」

森田 理恵（鳥取大学医学部附属病院手術部・材料部 看護師長 手術看護認定看護師）

「薬剤管理を通しての見知」

猪田 宏美（岡山大学病院薬剤部 主任薬剤師）

「歯科領域での見知」

山中 玲子（岡山大学病院医療支援歯科治療部 助教）

「地域連携での周術期栄養管理」

園井 みか（岡山大学病院周術期管理センター 管理栄養士）

「教育及び研究的視点での展望」

高橋 徹（岡山県立大学 教授）

グローバル化特別セッション

「看護の原点 重症心身障害児(者)看護のグローバル化への課題」

講師：澁谷 徳子 氏

(社会福祉法人旭川荘旭川荘療育・医療センター旭川児童院
看護課長補佐)

「岡山大学病院看護部におけるグローバル化の取り組み」

講師：原田 延枝 氏

(岡山大学病院看護部 継続教育担当看護師長)

「A Campus Life in Japan as an International Student from Myanmar」

講師：Mi Mi Thet Mon Win 氏

(Doctoral Student, Graduate School of Health Sciences,
Okayama University)

看護の原点 重症心身障害児(者) 看護のグローバル化への課題

澁谷 徳子

社会福祉法人旭川荘旭川荘療育・医療センター旭川児童院 看護課長補佐

昭和32年に開設された旭川荘では、医療福祉サービスの向上と人材育成のため、昭和38年から欧米の福祉先進国へ職員を送り出し(134人)、専門的知識・技術を学んできた。一方、昭和54年からは東南アジアを中心とした国から研修生を受け入れて(30ヶ国 961人)きた(平成26年11月現在)。互いに互いの国の文化や福祉事情について学び合い、認め合う中から、専門職としての知識・技術の向上をはかる目的である。そこで得られたものを、日本(岡山)の文化や風土にふさわしい、旭川荘の医療福祉サービスに反映させてきた。

旭川荘は、知的障害児・乳児・肢体不自由児の3つの入所施設から始まり、60年が経過した現在、施設・研究機関等89施設、利用者数約2,500人、職員数約2,200人となっている。障害医療福祉分野である旭川荘療育・医療センターは、「生命と存在の尊厳」をゆるぎない基本理念とし、障害児(者)総合病院であると同時に児童福祉施設として50年間その役割を担ってきた。

重症児(者)看護は、1. 基本的人権を守る 2. QOLの向上 3. ノーマライゼーション 4. リハビリテーションの4つの考え方を基本姿勢としてきた。

どんなに重い障害があろうとも尊い一人の人間であるとの思いを出発点としている。

その思いを心に刻み、看護師は、重症児(者)一人ひとりが持つ生きる力に合わせた看護、生活支援、より良い生活環境を整えている。さらに可能な限りの自立と社会参加を実践している。

看護師であっても、人工呼吸器を装着し、経管栄養を施行されている重症児(者)の障害の重さに圧倒され「今を生きている人」としての存在を見失いそうになることがある。

しかし、重症児(者)と日々関わっていく中で、彼らの個別的な特徴を五感でとらえ、理解できるようになってくる。実際に彼らの真のニーズを理解することの多くは困難であるが、日々のケアや働きかけの評価を、表情・筋緊張の変化・呼吸・脈拍数の変動など微細な変化から推察している。彼らにとって最も必要なケアを常に考え、最善を尽くしながらじっくり関わっている。それが重症児(者)看護の魅力であるという思いをもっている。

重症児(者)看護の原点は、かけがえのない一人ひとりの命と暮らしを守ることである。

今後、医療福祉分野における重症児(者)看護をさらに深化させていくためには、原点である先人の業績を学び直し、現在の看護師が忘れかけている手探りの中からの発見をすることである。旭川荘が国際交流の中で築き上げてきた特有の文化を背景とした中にも参考になることが埋もれている可能性がある。過去の業績を整理することで、新しい重症児(者)看護のグローバル化の再スタートになる。常に原点に返ることが進歩に繋がって行くとの認識を持ち続けたい。

引用文献

- 1) 片山雅博：重症心身障害児・者の緩和ケア 緩和ケア Vol. 23 Suppl. Jun. 2013
- 2) 社会福祉法人旭川荘：旭川荘国際交流35年のあゆみ 中野コロタイプ 2015

参考文献

- 1) 岡田喜篤 監修：重症心身障害療育マニュアル 新版 医歯薬出版 2015
- 2) 江草安彦 監修：果てしなく続く医療福祉の道 日本医療企画 2015
- 3) 澁谷徳子、猪下光：重症心身障害児(者)の看護ケアにおける看護師の思いに関する研究
日本看護研究学会雑誌 2010

岡山大学病院看護部におけるグローバル化の取り組み

原田 延枝

岡山大学病院看護部 継続教育担当看護師長

岡山大学は2014年から文部科学省のスーパーグローバル大学創成支援事業に採択され、「PRIMEプログラム：世界で活躍できる『実践人』を育成する！」事業を展開している。

当院もさらなるグローバル化を求められる中、2015年度に「岡山大学病院の診療に関するグローバル化ワーキンググループ(以下WG)」を発足し、当院が目指すべき診療に関するグローバル化の実現に向け検討し、答申をまとめた。取り組みの一つに院内の体制整備を挙げ、「外国人患者受入れ医療機関認証制度(JMIP)」の認証を受けることで、その目的が達成できると考え、2017年3月の受審に向け、現在作業をしている。また、2016年11月から「国際診療支援センター」も設立され、外国人患者の受入について中核的な役割を果たすこととなった。

看護部もグローバル化への取り組みを進めてきた。一つは、「外国人患者への看護の質の保証」である。看護部方針にも、外国人患者受入のための環境整備を挙げ、2017年1月から「ナースのための英会話研修」を行っている。二つめは「看護職のキャリア支援」である。2013年に再構築したキャリアパスには「グローバルな人材育成」を位置づけた。また同年より「看護職のグローバル人材育成研修」を行っている。そしてJICA青年海外協力隊へ現職派遣を行っており、毎年1名は派遣もしくは申請を行っている。他にも海外での医療支援活動に看護職員を派遣している。

さらに「国際交流支援WG」も活動している。外国人患者への看護実践上の課題を解決し、日本人患者へ行うような看護がしたいとの職員の思いを受け、2014年12月からWGを発足した。国際的な看護活動へ興味を持つ職員が多いことも発足理由となった。そして、すでに活動を続けている当大学保健学研究科「国際交流推進WG」とも連携を図っている。

WGメンバーは志願者で構成されており、看護職経験年数は2年から20年以上と幅広く、外国語ができる職員ばかりではない。しかし、臨床現場で看護している彼らだからこそ、見える課題や意見、自由なアイデアや興味がある。それがきっかけとなり、様々な取り組みへと発展した。例えば、WGメンバーが病院長と意見交換する機会を得て、それが院内共通で使用できる会話集の作成など、大規模な院内体制整備へと繋がる一役を担った。他にも、会話集の使用だけでなく、患者に寄り添った看護がしたいとの意見から、「ナースのための英会話研修」の企画となった。

以上のように、看護部の取り組みを継続していくことで、外国人患者への看護だけではなく、多様性を受け入れ、個を大切にしている日々の看護へも繋がっていくと期待している。

A Campus Life in Japan as an International Student from Myanmar

Mi Mi Thet Mon Win

Doctoral Student, Graduate School of Health Sciences, Okayama University

My name is MI MI THET MON WIN. I am from Myanmar and currently studying doctoral course in Graduate School of Health Sciences, Okayama University. Okayama University supports international students with the services to become familiar with Okayama University, Japanese Culture, and other students of Okayama University. Center for Global Partnerships and Education make as guarantor for rental apartment or housing in Japan for international students. Staffs from Center for Global Partnerships and Education are always a willingness to help the international students. I can enjoy the interesting events as Ikebana, Kimono making, and short trip under the management of GP office.

I am exciting doing research and learning the interesting research process. More and more studying, I got more and more experiences. As a research process, creating some things and trying to get the result are fascinating for me. I have the confidence to do more better result in the future. Professors in my graduate school have been extremely enthusiastic, dedicated and considerate to me as an international student. They understand the particular stresses that an international graduate student may be encountering and attempt to help the best they can.

I have been attending Japanese Language Class in Tsushima Campus as well as studying in Health Science Course. Therefore, I have a chance to study Japanese and also make international friends. I can learn different essence Japanese and also English which is really interesting and exciting for me.

Housing and dormitory for international students (Kuwanoki Dormitory, Fukui Dormitory, International House) are also arranged at Okayama University. I have no chance to stay there. However, I went there frequently to see with Myanmar friends, and international students to make discussion and participate in the events. Student's life in the dormitory is very enjoyable. We can get a chance to become familiar and understanding with other international students. I can enjoy in Okayama University Festival. It is a very delightful festival, and many students participate in it.

There are many cafeterias in Okayama University. I can get healthy and delicious food in there. Another good point in here Okayama can use a bicycle to go here and there. I can save travel expenses to go Tsushima Campus and downtown area of Okayama.

As a student of Okayama University, I can assess free admission to Ohara Museum (Kurashiki), Okayama Korakuen Garden (Okayama), Okayama Prefectural Museum of Art and Okayama Prefectural Museum. I had already gone there many times, especially Ohara Museum and Okayama Korakuen Garden.

My student life in Okayama University is full with plenty of interesting, enjoyable, exciting new experiences. Studying abroad make me more strength and energy for how to overcome obstacles in a new environment and language. I hope I will become more familiar with Okayama University and culture of Japan. I will become a part of the communication channel between Japan and Myanmar in the future.

一般演題(口演)

O-01 日常生活における在宅酸素療法疑似体験の学習効果ーテキストマイニングによる分析ー

○三木 佳子, 内海 知子, 岩本 真紀, 岡西 幸恵, 諏訪 亜季子
香川県立保健医療大学保健医療学部看護学科

【目的】在宅酸素療法(以下HOT)疑似体験をした学生の気づきから、学習効果を明らかにすることである。

【方法】3年次生対象の在宅看護学授業でCOPD事例を想定しHOT疑似体験演習を行った。演習は学内と日常生活における疑似体験で組み立てた。演習後に学生が提出した課題レポートの記述内容を分析した。〈演習方法〉学内演習では、携帯用酸素ボンベや酸素濃縮器の取り扱いと酸素吸入体験を行った。また、患者教育用ビデオで「呼吸法と体の動かし方」などを視聴した。日常生活での演習は次のことを学生に指示した。酸素鼻カニューレを装着して24時間日常生活を送る。自宅では酸素濃縮器に接続された延長チューブの代替えとしての15mの紐を壁と鼻カニューレに固定する。外出時は酸素ボンベの代替えに内容量が入った2Lペットボトルをバックに入れて持ち運ぶ。レポートは、「日常生活におけるHOT疑似体験演習実施で気づいたこと」を課題とした。〈分析方法〉課題レポートの記述内容をテキストデータ化しText Mining Studio 5.1を用いて分析した。学生の気づきを抽出するために係り受け頻度分析と、感情が抽出可能な形容詞の単語頻度分析を行った。また、それぞれの分析において出現頻度が上位である上位語を、原文参照機能で意味を確認した。

【倫理的配慮】香川県立保健医療大学倫理審査委員会の承認を得た。学生には課題レポートの評価終了後に研究協力を依頼し、拒否しても成績に影響しないことを文章で説明し同意を得た。(本研究は香川県立保健医療大学共同研究助成を受けた)

【結果】同意を得た学生は55名で、55のテキストデータを分析した。係り受け頻度解析では、「カニューレ-外す」「顔-洗う」「水-入る」「火-使う」「ドア-開ける」などが上位語にあった。単語頻度解析では、「息苦しい」「重い」「よい」「寒い」「苦しい」が上位語として抽出された。係り受け頻度解析の上位語の「カニューレ-外す」を原文参照すると、「行為のためにカニューレを外さなければならない」「寝ている時にカニューレを外してしまった」などがあつた。単語頻度解析の上位語の「よい」の原文参照では「トイレは和式がよいか、洋式がよいか」「家の中ではよいが、カニューレをつけて外出できない」「呼吸が苦しい時も酸素は1Lでよいのか」などが確認された。

【考察】日常生活においてHOT疑似体験を実施することで、洗顔、火の使用、ドアの開閉などの日常生活のさまざまな場面の動作に視点を向けられていた。また、「重い」「苦しい」「寒い」などの感情が体験できた。さらに、「よいのか?」「よいが…」と疑問がわき思考を発展させることができていると考えられた。

【結論】日常生活におけるHOT疑似体験を演習することで、体験しないと得られない気づきが得られる。療養者が体験する具体的な日常生活活動や感情に気づき、療養者が疑問に思うことまで思考を発展することができる。

O-02 成人看護学実習における学生のルーブリックの活用の現状

○鈴木 香苗¹, 中信 利恵子¹, 松本 由恵¹, 岡田 淳子², 横山 奈未¹, 山下 彰子¹, 植田 喜久子¹
日本赤十字広島看護大学看護学部¹, 県立広島大学保健福祉学部看護学科²

【目的】A大学では、治療および経過別に多様な医療や看護を体験することを目的として手術室、集中治療室、救急外来と、外来化学療法室、放射線治療科、透析室、緩和ケア病棟での成人看護学実習を行っている。成人看護学実習の到達度は「学習者の達成度を示すための基準」であるルーブリックを用い、4段階で評価する。また、学生が実習目標を達成できるように実習前に評価基準を提示したルーブリックを学生と共有している。本研究の目的は、学生が実習目標の達成状況を可視化し自己の課題を検討するために、学生のルーブリックの活用状況を明らかにすることである。

【方法】質的記述的研究デザインとした。対象者は、4年次前期に成人看護学実習を履修した新人看護師とした。調査期間は平成28年8~9月で、データ収集方法は半構造的面接とし、プライバシーが確保できる個室で行い、その内容をICレコーダーに録音した。面接内容は逐語録にした。逐語録をくり返し読み、成人看護学実習におけるルーブリックの活用に関する箇所を抽出し、質的帰納的に分析した。

【倫理的配慮】A大学研究倫理・審査委員会の審査を受け承認を得て実施した(No. 1511)。

【結果】対象者は4名で、面接時間は35~60分(平均43.5分)であった。分析の結果、ルーブリックの活用状況では、《評価基準の達成に向けて実習方法を自己決定する》《実習指導者の指導内容を目標達成のために活用する》《日々の実習目標と学習成果を一貫して記録する》《自己評価と教員の評価した実習評価に納得する》の4カテゴリーが抽出された。一方で、ルーブリックを活用していない状況では《評価基準を意識して実習していない》《不明瞭な目標達成度の理解により自己学習が不十分である》《実習内容の理解が曖昧なまま実習に参加する》《体験にとどまり、評価基準に関連付けて知識を深めていない》の4カテゴリーが抽出された。

【考察】ルーブリックを活用していた状況としては、評価基準をもとに実習方法を自己決定し、実習目標の到達に向けて主体的に行動できていた。ルーブリックを使いこなすことで、学生、教員共に形成的評価が可能となり、経過を追って学びが深まることの効果が期待できると考えられる。一方、ルーブリックを使いこなせていない状況としては、実習内容の理解が曖昧で、具体的に行動目標を考えることが困難であり、受動的な実習となっていた。教員が、学生の体験を評価基準に転換して説明し、より高い到達度の評価基準を行動目標として活用できるように自己主導型学習へと導く必要がある。

【結論】学生がルーブリックを使いこなすための具体的方法を理解するために、教員は実習前にルーブリックの利点を説明し、実習中も活用がきているか、確認することが重要である。また、学生が自己の課題を明確にし、主体的に評価基準のより高い到達を目指すようにしていく必要が示唆された。

O-03 子育て支援活動における「災害への備え教育」実施前後の行動化や意識の変化

○古場 真理, 安成 智子

宇部フロンティア大学人間健康学部看護学科

[目的] 子育て中の母親らに対する「災害への備え教育」実施前後の災害に対する備えへの行動化や意識の変化を明らかにする。

[方法] 対象は、研究者らによる「災害への備え」教育の参加者であり、「災害への備え教育」受講前の事前調査に協力が得られた未就学児の母親22名のうち、「災害への備え教育」実施5か月後の事後調査にも協力が得られた7名である。「災害への備え教育」実施前後に本研究の趣旨を説明し、無記名自記式質問紙を配布し回答を依頼した。回答した質問紙は封筒に入れ封印したものを直接回収した。「災害への備え」教育の実施前後における災害への備えに関する意識や知識の有無、備えの実態について分析した。分析手法は、SPSS Ver. 22による記述統計(単純集計)を用いた。

[倫理的配慮] 研究者の所属先の研究倫理委員会による承認(承認番号2014002)を得て実施した。

[結果] 事後調査の回答は「災害への備え」教育の事前調査22名中7名(回収率31.8%)より得られ、子ども一人を育てている者は4名(57.1%)、2人の子どもを育てている者は3名(42.9%)であった。被災体験をもつ者は4名(57.1%)であった。「災害への備え」教育後に被災体験をもつ者は1名(14.3%)であった。災害に対する備えに関する「災害への備え」教育実施前後の変化としては、かかりつけの病院以外の病院・医院の場所を知っている者が3名(42.9%)から5名(71.4%)、ハザードマップで自宅等の場所を確認した者が0名(0%)から3名(42.9%)、子供の既往歴や予防接種歴・常備薬に関して説明できる者が4名(57.1%)から6名(85.7%)と増加傾向であった。

「災害への備え」教育受講後の変化として、「避難用の物を準備しないとといけないと思った」、「子どもを抱きかかえて避難するため、厳選して準備しておく必要がある」、「車の子供の着替え等常に乗せるようになった」、「災害に対する備えに関するパンフレット、テレビ番組等に目を留めるようになった」、「海拔何mの表示を見て地形を把握するようになった」、「備え教育で必要性を一層実感したので避難袋を作成した」ことを認識していた。

[考察] 「災害への備え教育」実施前後の調査から、「災害への備え」教育前と比べて教育実施後はハザードマップで自宅等の場所を確認したり、災害に関する番組等に目を留めるようになる等、災害に対する備えへの行動化や意識の変化がみられた。

[結論] 子育て中の母親らに対する「災害への備え教育」実施前後の調査結果から、災害への備え教育が必要であると考えられた。

O-04 当事者参加授業における学習効果についてー母性看護学Ⅱの授業に関してー

○古場 真理, 安成 智子

宇部フロンティア大学人間健康学部看護学科

[目的] 母性看護学Ⅱの授業で実施した当事者参加授業「子育て座談会」の学習効果について明らかにした。

[方法] 母性看護学Ⅱの授業で実施した当事者参加授業「子育て座談会」には未就学児の母親とその子供9組とC大学看護学科3年生95名が参加した。子育て座談会は、学生5～6名のグループに母子1組の島を作り、授業時間内に可能な範囲で学生グループが島を移動する形式で実施した。各グループの学生が司会進行を務め、学生が妊娠・出産・育児について質問し母親に体験談を語ってもらった。子育て座談会終了後、3年生95名に「この授業で学んだこと」の視点で自由記載後、提出してもらった課題レポートの内容を文脈ごとに分類し、学習効果を検討した。

[倫理的配慮] 参加当事者については、A地区の子育て支援活動において授業への参加希望を募り、授業および研究の趣旨を説明し同意を得た。対象学生については、調査への賛同は自由意志である事を説明し、協力を得た。

[結果] 3年生88名(回収率は92.6%)を分析し以下の結果を得た。学生が「この授業で学んだこと」に記述した内容は、Kathleen B. Gabersonらの「看護実践教育に期待される学習成果」の4側面(知識・技術・感情・価値観)から1文脈単位で抽出し、類似する記述内容を集約してカテゴリー化した。1文脈を1カードとして合計511枚のカードが抽出された。その内容は「知識」262枚(51.3%)、「技術」198枚(38.7%)、「感情」38枚(7.4%)、「価値観」13枚(2.5%)であった。「知識」の側面には、育児162枚(31.7%)、心理100枚(19.6%)、の2カテゴリーが抽出された。育児の学習内容では、「外に出たときは、目を離さないように気を付けている」といった子供の安全や社会資源活用、心理の学習内容では、「大変なことが多いが愛しい気持ちが大きいため育児が続けられる」といった喜び・嬉しさや育児の個性が抽出された。

[考察] 当事者参加授業の学習効果として、育児中の母親の生活や社会的背景を理解していたこと、個性に応じた育児支援が重要であること、育児中の母親との関わり方について通常の講義では得られない体験を通して感性を伴った学びをしていることが分かった。

[結論] 学生にとって育児中の母親について感性を伴った学びができており、当事者参加授業を導入することは必要であると考えられた。

O-05 プロバイオティクスタブレット投与による成人女性の便秘および便臭の改善の評価

〇笹岡 晴香¹⁾、吾妻 健²⁾

高知大学医学部附属病院看護部¹⁾、高知大学教育研究部医療学系環境医学²⁾

【目的】プロバイオティクスタブレットを成人女性を対象に投与し、便秘緩和と便臭軽減を検討することである。

【方法】投与方法は、健康な成人女性17名(平均年齢40.9±13.6)にプロバイオティクスタブレット3粒入り1袋(1.5g)を1日1回投与させた。便秘評価方法は、日本語版便秘評価尺度(CAS)1を用いた。便臭評価は、自己評価による官能試験を用いて評価した。得られたデータは、記述統計およびKruskal-Wallis検定、Friedman検定を用いて投与前と投与7日目および投与14日目について分析し、7日間毎にどのように改善されるのか検討した。

【倫理的配慮】対象者への説明と研究への参加の同意は、対象者に研究の主旨および方法について、文章と口頭で説明した。なお、タブレットは特定保健用食品として厚生労働省より認可され市販されている。本研究による健康被害が生じた場合の補償は、研究実施に伴う保険で補うこととした。対象者の希望があれば報告書等を提示するようにした。本研究は、高知大学医学部倫理委員会の承認を得た。

【結果】CASの全項目の平均は投与前5点から投与7日目3.46点、14日目3.36点と減少し、項目別では、「排便回数」に有意な減少がみられた。官能試験により便臭の減少が軽減する可能性が期待された対象者は7名であった。

【考察】便秘について、CASおよび日々の排便状況の結果は、「排便回数」「便の量」「排便時の臭い」の項目で点数の減少がみられたことにより、便秘に付随する症状を和らげることが示唆された。便秘時の自己対処法として「食物繊維や乳製品を取り入れる」と回答が得られたことより、本研究で使用した健康補助食品は、便秘に対する対処法として日常的に服用し易いことが示唆された。便臭について、官能試験の結果、便臭の強さは減少傾向であった。また、便臭のメチルメルカプタンや硫化水素の濃度が、投与後にやや減少した。これらの結果は、タブレットには腸内環境を整えることにより便臭の減少効果があったことが示唆された。本研究では、プロビオン酸菌由来のタブレットの投与により、一般成人女性における便秘緩和と便臭の減少に対して個人差もあることを否定できないが、ある程度の効果を得ることができた。

【結論】本研究は、プロバイオティクスタブレットの投与により、一般成人女性における便秘緩和と便臭軽減に対して有意な効果が示唆された。

1: 深井喜代子 杉田明子 田中美穂(1995), 日本語版便秘評価尺度の検討, 看護研究, 28 (3): 25-32.

O-06 訪問看護師が在宅高齢療養者に内服支援を行う看護プロセス(第1報)

〇坂根 可奈子、福岡 美紀、津本 優子、宮本 まゆみ、内田 宏美

島根大学医学部基礎看護学講座

【目的】地域包括ケアシステムの構築が進み、在宅医療において訪問看護師の役割発揮が期待される一方、退院後の療養者の内服管理が課題の一つとして指摘されている。そこで本研究は、訪問看護師が在宅高齢療養者に内服支援を行う看護プロセスを明らかにすることを目的とする。

【方法】研究デザインは質的帰納的研究である。研究参加者は、A県内の訪問看護ステーションで勤務する訪問看護経験10年以上の看護師とした。半構成的面接を実施し、高齢療養者への内服支援における状況把握から援助までの看護プロセスについて尋ねた。面接内容を逐語録とし、分析データとした。分析データの中から訪問看護師の内服支援に関する記述を抽出し、コード化した。コードの意味内容の類似性に基づきサブカテゴリ化し、さらに抽象度を高めてカテゴリ化した。

【倫理的配慮】島根大学医学部看護研究倫理委員会承認後、研究参加者に研究協力の任意性、研究協力同意後の撤回の自由、個人情報への守秘、公表等を文書と口頭で説明し、同意を得て実施した。

【結果】研究参加者は2名であった。分析の結果、93コードが抽出され、31サブカテゴリ、14カテゴリに分類された。以下カテゴリを<>で表す。訪問看護師は、在宅高齢療養者の<内服管理状況の把握>、<生活状況の把握>、<内服管理に対する認識の把握>をしていた。それらの状況把握から<内服管理がうまくいかない背景のアセスメント>を行い、具体的支援として<内服管理を助けるツールの活用>、<生活状況に即した内服方法の提案>、<本人のできる力を大切にしたい内服薬準備・確認の支援>につなげていた。また状況に応じて、<医師・薬剤師の専門的支援への橋渡し>となり、<処方内容を生活に合わせるための医師との連携>、<内服状況確認のための居宅サービススタッフとの連携><具体的支援へつなぐための薬剤師との連携>をしていた。そして<支援後の振り返り>を行い、次の支援につなげていた。これらのプロセスは、訪問看護師の<内服管理に対する本人の認識への配慮>、<これからも自宅で過ごしてもらうという意識>が基盤となっていた。

【考察】訪問看護師は、限られた訪問時間の中で内服管理状況を捉え、内服管理がこれまでの生活状況や本人のできる力に沿うよう支援や調整を行い、支援後の振り返りを行っていた。在宅高齢療養者の内服管理を支援するためには、本人の認識や生活全体を包括的に捉えて支援する重要性が示された。これは、本人の認識や生活を中心に捉え、状況に応じて柔軟に支援する訪問看護師の姿勢が反映された結果と考える。

【結論】訪問看護師の在宅高齢療養者への内服支援について分析した結果、内服管理状況を捉え、具体的支援や他職種との調整を行い、支援後の振り返りを行う看護プロセスが見出された。以上のことから訪問看護師が、本人の認識や生活全体を包括的に捉えて支援する重要性が示された。

O-07 終末期在宅療養者を支える高齢介護者の訪問看護師に対する役割期待

○杉本 由起子¹、河野 保子²、讃井 真理²

¹ 訪問看護AOIケアリングステーション¹、広島文化学園大学大学院看護学研究科²

I 目的

日本の高齢化率は26.3%(平成27年)であり、今後も進行が予測されている。厚生労働省は「住み慣れた地域で自分らしい暮らしを人生の最後まで続けることができる」体制作りを目指している。

しかし、自宅で最期を迎えた人は12%程度(平成25年)に過ぎず、多くの人は在宅看取りを断念していると推察され、看取りに対する十分かつ必要な訪問看護の提供がなされていないとも考えられる。

そこで本研究は、生命予後3か月程度(疾患の特定はない)の告知を受けている終末期在宅療養者を支える高齢介護者に焦点を当て、訪問看護師にどのような役割を期待しているのかを明らかにする。

II 研究方法

1. 実態調査研究

2. 調査期間 平成28年5月～8月

3. 研究対象者

- ・主治医より予後不良(3ヶ月)を告知されている在宅療養者の高齢介護者。12名を対象(以後、予後説明有群；A群)。
- ・上記対象者の比較として、要介護認定を受けている在宅療養者の高齢介護者。23名を対象(以後、予後説明無し群；B群)。

4. 調査内容

- 1) A群及びB群の状況：①年齢 ②性別 ③家族構成 ④続柄 ⑤介護期間 ⑥Zarit介護負担感尺度 ⑦気分調査 ⑧スピリチュアリティ健康尺度
⑨研究者が有識者の助言を受け独自に作成した役割期待に関する調査(24項目)等
- 2) A群及びB群が介護している療養者の状況：①年齢 ②性別 ③要介護度 ④疾患 ⑤医療処置の実際 ⑥利用中のサービス等

5. 分析方法

記述統計量の算出を行い、役割期待調査や調査尺度の結果を予後説明有り群と無し群の2群において対応のないt検定を行った。

III 倫理上の配慮

本研究は広島文化学園大学看護学研究科倫理委員会の承認を得て実施した。訪問看護ステーション及び対象者に、文書と口頭で説明し同意書を得て実施した。利益相反はない。

IV 結果

対象者は予後説明有り群(A群)と予後説明無し群(B群)は、男性3名(23.1%)、男性4名(17.4%)、女性9名(69.2%)、女性19名(82.6%)、平均年齢はそれぞれ73.8±8.0歳、74.7±7.1歳であった。A群、B群が介護している療養者の平均年齢と介護度の中央値は、それぞれ83.1±11.2歳、85.7±9.4歳、要介護4.5、要介護度3であった。訪問看護師に対する役割期待は、「少しでも病気を治して欲しい」の項目は、A群よりB群の方が有意に値が高く($p<0.05$)、「異常時早急に訪問して欲しい」の項目は、B群よりA群の方が有意に値が高い結果となった($p<0.05$)。

V 考察

A群は在宅療養者が急変することの不安を表明しており、杉琴(2009)の報告と一致していた。使用したZarit介護負担感尺度、気分調査、スピリチュアリティ健康尺度においては2群間に有意差は認めなかった。

VI 結論

予後不良の告知を受けている終末期在宅療養者を支える高齢介護者は、訪問看護師に対して「緊急時の対応」を役割期待として持っていた。

文献 杉琴さやこ：終末期医療における在宅療養の課題、社会学研究、Vol.27(1)、p9、2009

O-08 看護学教育のグローバル化の試みー海外看護学短期研修の構築と単位化ー

○池田 理恵、高橋 幸子、山口 三重子、井上 幸子

岡山県立大学保健福祉学部看護学科

【緒言】香港理工大学は国際交流活動が盛んで、毎年7月中旬の2週間、協定大学(7カ国)の学生を対象とした看護学短期研修を行っている。語学研修とは異なる看護学の内容をベースとした研修プログラムであるが、この時期は日本の大学の学期中で、A大学の学生が参加することは難しい。そこで、日本の学生のために9月に1週間の短縮版をA大学と協働で企画し試行した。

【目的】A大学では教育改革の一つとしてグローバル化を掲げ、学生が在学中に一回は海外研修に参加することを目指しており、本研究の目的は香港理工大学における海外看護学短期研修の研修内容を構築し、単位化に向けてパイロットの成果と課題を明らかにすることである。

【方法】

1. 海外看護学短期研修の構築：研修内容について両校の担当教員が年間3回の会議と数十回のメール協議を行った。日本の学生の語学力を考慮し、理解しやすい内容や興味を持ちやすい内容となるよう擦りあわせた。
2. 海外看護学短期研修の成果と課題：学生の「研修後レポート」を研修の成果と課題の視点で分析した。さらに「国際交流に関するアンケート」を項目毎に分析した。「国際交流に関するアンケート」は「異なった文化や考え方などを体験・理解することができた」「異文化を体験・理解することの重要性に気づいた」「自分の専門分野の知識・経験を増やすことができた」「自分の専門分野の知識・経験をもっと増やしたいと思うようになった」など12項目で、とても当てはまる～少しも当てはまらないの4段階で評価してもらった。

【倫理的配慮】参加学生に個人情報の保護、他の目的に使用しないことを説明し、研修内容の公表について了承を得、承諾書に署名を得た。

【結果】

1. 海外看護学短期研修の構築：研修には3名の学生が参加した。研修内容は、1日目に、オリエンテーション、昼食会、老人施設でのシュミレーション・プログラム、2日目は、スタンダードプリコーションに関するワークショップ、アロマセラピーのレクチャー、3日目、4日目に老人福祉施設や病院等の見学をした。最終日に学生が老人看護と大学の紹介を行い、修了証を授与された。
2. 海外看護学短期研修の成果と課題：学生の研修レポートから「貴重な体験」「充実」「刺激の連続」「出会い」「日本の良さに気付く」「人の温かさ」に気付く「苦手な英語を勉強したい」といった内容が抽出された。4段階評価のアンケート調査は全ての項目で「とてもあてはまる」「まああてはまる」との肯定的な評価であった。

【考察】学生が興味を持てる内容や、既習の基礎的なコンテンツを組み込み、理解しやすい工夫した結果、今後の学習意欲の向上につながり、単位化のためのパイロットとして成功であった。

【結論】学生の看護学海外短期研修の体験は異文化理解、学習意欲の向上に効果が認められ、単位化に向けて足がかりとなった。

O-09 慢性肝炎から肝細胞がんに至った患者のスピリチュアリティの様相

○世羅 めぐみ¹⁾, 井上 裕美子¹⁾, 近藤 真紀子²⁾
岡山大学病院¹⁾, 岡山大学大学院保健学研究科²⁾

目的: 慢性肝炎から肝細胞がんに至った患者のスピリチュアリティの様相を明らかにする。

方法: 1. 用語の定義: スピリチュアリティ=生きる意味や自己の存在に意味をあたえるもの。2. 対象: 5年以上慢性肝炎を患い、かつ肝細胞がんの内科的治療を開始(2〜3回程度)している者。3. データ収集方法: インタビューガイドを用いた半構造化面接法。4. 分析方法: 質的帰納的分析。1) 個別分析: 逐語録から研究目的に関連する部分を抜き出し、下位カテゴリーを生成する。2) 全体分析: 対象者全員の下位カテゴリーから、意味の類似するものを集めて抽象度を高め、サブカテゴリー・カテゴリーを生成する。5. 倫理的配慮: 研究参加は自由意思に基づくことなどを文書と口頭で説明し同意を得ると共に、所属先の研究倫理委員会の承認を得た。

結果: 1. 対象の概要: 60・70・80歳代各1名(計3名)、男性2名・女性1名、B型肝炎1名・C型肝炎2名、インターフェロン治療経験者2名を含む。2. スピリチュアリティの様相: 《a. 偏見や退職など生活への悪影響》《b. 増悪による脅威に直面し死を意識》を含む【A. 慢性肝炎による生活への悪影響及び増悪による生命の危機への直面】、《a. 罹患期間は長いが沈黙の臓器という特徴故に生活に支障なし》《b. 治療法の確立や助成制度が肝炎の受容を促進》《c. 過酷な治療をやり遂げた自己肯定感》《d. 肝細胞がんの早期発見・肝炎治療による肝機能の温存により、肝細胞がんの治療可能という希望ががんの受容を促進》《e. 生きたいという強い意思・ポジティブシンキングで治療に臨む》《f. 移植や感染で人に迷惑をかけてまで生きたくない》を含む【B. 慢性肝炎から肝細胞がんに至る経過への肯定感】、《a. 周囲に支えられていることへの感謝》《b. 自分なりの努力や楽しみを見出すことで病気を乗り越える》《c. 生きがいや趣味を持ち生活が充実している》《d. 幼少期に死別した父が病気を乗り越える大きな力となる》《e. 戦争を乗り越えて得た強さが自信を生む》を含む【C. 人生を豊かに生きるエネルギー】の3つに集約された。

考察: 対象者は全員、自己の生命の危機に直面したにも関わらず、スピリチュアルペインの表出は認められなかった。スピリチュアルペインが表出されなかった要因は、①慢性肝炎の緩やかな経過の中で、肝炎の終末像に対する心の準備、肝炎治療を完遂したことへの肯定感、肝炎治療により肝機能が温存されたことなど、慢性肝炎から肝細胞がんに至る過程の特殊性が、がん診断から生じるスピリチュアルペインを緩和した、②人生の中で困難を越えてきた自信が各々のスピリチュアリティをより強固にし、がん発症の受容を促した、の二点と考えられる。以上から、慢性肝炎から肝細胞がんに至った患者のスピリチュアリティは、慢性肝炎の経過の特殊性と、患者固有の体験に特徴づけられる。本研究の限界は、対象数が少なく普遍化できないことである。

O-10 看護師の看護補助者への業務の委譲についての研究

○吉川 あゆみ, 斎藤 信也
岡山大学大学院保健学研究科

【目的】本研究の目的は、看護師と看護補助者間での業務分担の現状を調査し、その実態を明らかにし、将来の業務分担のあり方の考え方を含め、そこから見えてくる現在の看護師が抱く看護観を探ることである。

【方法】X県内にある規模の異なる3病院に勤務する看護師、看護補助者1,011人を対象とし、無記名自記式質問紙調査を行った。データは記述統計的に解析し、群間の比率の比較は χ^2 乗検定を行った。

【倫理的配慮】対象病院の看護部長、対象者に対し個人情報の匿名化、データの保管・処理方法、研究協力と拒否・中断の自由について説明し同意を得た。また、本研究は岡山大学大学院看護学分野倫理審査委員会の承諾を受け実施した。

【結果】有効回答者数は788人、有効回答率は78.0%であった。看護師からみて、現在、看護補助者が行っている看護行為では、配膳・下膳、ベッドメイキングが特に高い比率を示した。食事介助を施設別に比較すると大規模病院では1.7%と実施率が低いが小規模病院では全て看護補助者が行っているという結果が得られた。今後、看護師が看護補助者に行ってもらいたい看護行為では、現在看護補助者が実施する業務に加え、寝衣介助・着替え介助、食事介助といった療養の世話にあたる業務の比率も高くみられた。

今後の分担では施設規模別の比較では食事介助において大規模病院では看護師の約半数であり、中規模・小規模病院では90%以上の看護師が今後、看護補助者に行ってほしいと回答した。

【考察】現在、看護師が行っている日常生活動作の援助を今後は大幅に看護補助者に委譲したいと考える看護師が多いことが判明した。日常生活動作の援助行為が一律・定型的な判断によるものであれば看護補助者に任せ、看護師の専門的判断を要するものなら、看護師自身が行うというのが、業務分担の基準だと考えられる。しかし、今回の結果から、看護師はそうした判断によらず、一律に介護要素の強い日常生活動作の援助を看護補助者に委ねようとしているように考えられる。

目前の過重業務緩和目的のみの看護補助者への業務委譲が、看護師のアイデンティティに関わる重大な問題を含むことに自覚の少ない看護師が少なからず存在することが示唆された。看護師の過重な業務負担への対応は理解できるが、看護師が行うべき看護行為と看護補助者に委ねてよい看護行為の線引きに各自の看護観が反映されていることに看護師自身が自覚的になる必要があると思われた。

【結論】本研究では、①現状では療養環境の整備に関する大半の看護行為が看護補助者の業務となっており、日常生活の援助に関するものは施設により看護補助者の実施率に違いがあった。②今後は日常生活の援助も大幅に看護補助者に委譲したいという回答が半数以上あった。③看護の効率性の観点のみから、看護補助者に看護業務を委譲してゆくことは、看護師のアイデンティティに影響を与える可能性が示唆された。

O-11 テキストマイニングを用いた在宅看護研究の動向

○菊地 よしこ¹⁾、谷垣 静子²⁾

山陽学園大学看護学部看護学科¹⁾、岡山大学大学院保健学研究科²⁾

【目的】在宅看護研究の動向を探る。

【方法】研究対象：医中誌 Web (Ver. 5) を用いて、「在宅看護」「訪問看護」をキーワードとし原著論文のアブストラクトを検索した。その後1984年から2015年までの論文のタイトルを精読し重複を確認後、明らかになった2167のアブストラクトを研究対象とした。分析方法：検索結果をテキストマイニング (Text Mining Studio 6.0, NTT データ数理システム) を用いて単語頻度解析を行い、注目語情報を「訪問看護」として分析をした。

【倫理的配慮】研究対象に施設名、個人名など全て匿名化されていることを確認した。

【結果】頻度順位100位までを「単語、頻度順位、頻度件数」で示した。単語頻度解析 (出現する単語の回数) は3つのカテゴリー (対象、場、関係) に分類された。訪問看護の対象とは「患者、13, 570」「利用者、31, 273」「療養者、66, 175」であった。場としては「在宅、24, 348」「地域、38, 240」「病院、89, 153」であった。関係としては「支援、15, 447」「連携、17, 409」であった。注目語情報を用いた分析では、「訪問看護師-役割」「訪問看護師-実施」「訪問看護師-認識」が挙げられた。

【考察】在宅看護の対象者の用語が「患者」「療養者」「利用者」であった事は、病をもち看護を受ける人から治療と養生をする人、そしてサービスを契約して利用する人へと立場を変えてきた事を示す。これは2000年に介護保険法が開始され「措置」から「契約」へと利用者選択制度への変遷が在宅看護の対象の呼称を変化させたといえる。

在宅看護の場としては「病院」から「地域」「在宅」に行き来する人々を対象としていることが明らかとなった。在宅は、「家」という場だけで捉えるのではなく、人々が暮らす地域社会から考える必要性が示された。さらに場をつなぐために必要な関係に関する用語は、「支援」「連携」があげられた。しかし近年使用される「協働」などの用語は見られず、今後の頻出する可能性が考えられる。

また、注目語として、「訪問看護師」に対して「役割」「実施」があげられ訪問看護師の業務内容を明らかにする研究が散見された。「訪問看護師-認識」は、訪問看護師がどのように認識されているのか、さらに訪問看護師自らがどのように認識しているのかを示していると考えられる。このことは訪問看護師の業務内容や働きが認識されていない裏付けともいえる。

【結論】在宅看護において看護の対象者が「患者」「療養者」「利用者」として、呼称を変化させていた。さらに訪問看護師の業務内容を明らかにする研究が多く、訪問看護師がどのように認識されているのかの研究が多くなっていた。

今後は年次推移で分析し歴史的背景や今後重要となってくる研究課題を明確にしていける必要がある。

謝辞) 分析にあたり「Text Mining Studio 6.0」NTT データ数理システムを使用させていただきました数理システム様に感謝します。

O-12 介護者の経時的変化に着目した研究の動向

○武田 留美子

広島都市学園大学健康科学部看護学科

【目的】介護者は介護役割を担った時、負担や肯定感、様々な心理状況があることが実証されている (広瀬2010)。キューブラー・ロスは、心理状況が過程を経ることを提示した。介護者の心理状況が時間によって変化すること (以下、経時的変化とする) に着目した研究は、歴史が浅いとされる (布元2010)。本報告では、介護者の文献研究において、介護者の経時的変化に着目して行われた研究の動向を探ることを目的とする。

【方法】医中誌 Web を用いて、1980年～2016年までに発表された研究において、「介護者」「変化/変容」のキーワードをテーマにしているものおよびアブストラクトに含まれているものを検索し、原著論文に絞った結果、597件となった。その中で、介護者の心理的な変化に焦点を当てた研究のみに限定し、29件を抽出した。29件の論文について、(1) 分析方法、(2) 対象者の人数と属性、被介護者の属性、(3) 何に焦点を当て、研究をしているかについてのカテゴリー化、以上3点について、検討した。

【倫理的配慮】文献の使用にあたり、著者の研究事実について十分配慮を行った。

【結果】(1) 分析方法は29件中、量的研究が4件、質的研究が23件、先行研究の文献をもとにした動向研究は2件であった。質的研究の場合、回想手法が20件、時期を定めた定点手法が3件であった。(2) 対象者の人数は、量的研究が、11名～1,036名。質的研究の場合1研究あたり1名～49名であり、平均12名。事例研究は6名～40名であった。対象者の属性の割合について、嫁の割合が一番多く (33.6%)、娘、妻、夫、息子の順であった。また、被介護者の属性としては、認知症に限定したものが29件中12件あり、中心静脈栄養や脳血管疾患に限定したものが各1件、その他は限定していなかった。(3) 対象文献19件のうち、被介護者属性が認知症以外の論文10件の研究の焦点をカテゴリー化すると、＜介護認識の変化＞が5件、＜専門職への期待やニーズの変化＞が3件、＜介護負担の変化＞が2件であった。被介護者属性が認知症の論文9件は、＜介護認識の変化＞であった。

【考察】介護者の経時的変化に着目した研究は、質的研究による回想手法がほとんどで定点手法が少ない一因には、対象者の協力などに難しさがあると考えられる。また、＜介護認識の変化＞に焦点を当てた、被介護者属性が認知症という研究が多いことは、認知症介護における介護者援助の必要性に研究者が応えた現れだといえる。介護者の心理状況は時間とともに変化することを踏まえ、さらなる経時的変化の研究の蓄積が望まれる。

引用文献：広瀬美千代 (2010) 家族介護者のアンビバレントな世界 ミネルヴァ書房

布元義人ほか (2010) 認知症高齢者における家族介護者の介護認識の変容に関する動向 日本認知症ケア学会誌第9巻第1号

O-13 耳鼻咽喉科・頭頸部外科がん患者における質問促進パンフレットの有効性

○川本 萌子, 莉田 理枝, 細川 祥恵
鳥取大学医学部附属病院

【はじめに】患者、家族にとって診察室での限られた時間の中で医師の話聞きながら、その場で自身の疑問や気がかりを質問することは容易なことではない。実際に「何を聞けばいいかわからない」「緊張して聞きたいことを忘れてしまう」といった声を耳にする。本研究では、国立がん研究センターで作成された、患者自身が聞きたいことを整理できるパンフレットを耳鼻咽喉科・頭頸部外科のがん患者に対して使用した結果、有効であったかを分析する。

【方法】

対象：手術、初回化学療法、放射線療法を実施する予定のがん患者30名。

調査方法：患者がパンフレットを使用したのちアンケート調査。

分析方法：アンケート8項目の質問項目を点数化し、集計した。また、アンケートには自由記載欄を設け、パンフレットに対する対象からの率直な意見として集計した。

【倫理的配慮】本研究の計画、実施、公表については、所属施設の倫理審査委員会の審査を受け、実施の承諾を得ている。研究対象者は自由意思により研究に参加しており、個人が特定されないよう年齢、性別、疾患名、治療方針のみ公表している。

【結果】パンフレットを使用していたアンケート結果は以下の通りとなった。①質問したいことが質問できましたか85% ②質問したいことがパンフレットに載っていましたか95% ③パンフレットの記載が面倒だと感じましたか85% ④パンフレットを利用することで医師に質問しやすくなりましたか87% ⑤パンフレットを利用することで疾患や治療について理解が深まりましたか85% ⑥パンフレットを利用することで説明を聞く心の準備ができましたか88% ⑦パンフレットを利用することで病気、治療についての不安が軽減されましたか79% ⑧これからもこのパンフレットを医師との面談前に使用したいですか86% ⑦の不安が軽減されなかった理由として、「何事も不安ばかりだった」という意見が上がった。

【考察】パンフレット使用によって、患者の過半数以上が満足しているという結果になった。そのため当科のがん患者において、パンフレットは有効であったと言える。しかし、他の項目と比較し⑦が低値であったことから、パンフレットの使用だけでは患者の不安はあまり軽減せず、少なからず不安を抱えたまま治療方法を選択していると考えられる。治療について医師からの説明を受けても、がんと診断されたことによるショックや恐怖感などの様々な不安な気持ちによって、受容することができないまま治療が開始されてしまう場合もあるだろう。そのため、看護師は患者が自分の意思で治療に取り組めるよう、患者と気持ちを共有し理解に努める必要がある。

【結論】パンフレットを使用することで、患者自身の疑問や気がかりの解決、理解につながった。しかし、患者は少なからずパンフレットでは埋められない不安感があるため、看護師は患者の思いを理解し、患者が安心して療養生活を送れるよう支援していく必要がある。

O-14 パシーマ®パットシーツの乳児の寝床内気候と睡眠への影響

○池田 理恵¹⁾, 深井 喜代子²⁾, 関 明穂²⁾
岡山県立大学保健福祉学部看護学科¹⁾, 岡山大学大学院保健学研究科²⁾

【緒言】健康な乳児19例を対象に寝床内気候を測定した結果、温度に季節差はなかったが、湿度は夏に有意に高かった¹⁾。そこで、湿度のコントロールに効果的と推測されたパシーマ®パットシーツ（精製された脱脂綿とガーゼを使ったパットシーツ、龍宮株式会社）の有用性を検討し、乳児の寝床内気候を整える一助として考えた。

【目的】乳児の寝床内湿度と睡眠を整える寝具として、パシーマ®パットシーツが有用か明らかにする。

【方法】対象は月齢3～5ヶ月の乳児4例（C, E, F, G）である。夏季に対象宅において、普段の寝具条件とパシーマ®パットシーツ、対照としてポリエステルわたベビー布団を用い、それぞれ三夜ずつデータ測定を行った。寝床内気候はデータロガー（LT-8B, グラム社）を用いて敷き布団の背部・足部の温・湿度を1分毎に測定した。睡眠・覚醒状況はアクチグラフを乳児の足首に装着し、母親にはダイアリーの記載を依頼し、アクチグラフのデータと照合した。寝床内気候は、寝具条件毎に経時的に観察的に分析し、検定には一元配置分散分析を用いた（SPSS ver. 22）。普段の寝具はシングル羊毛布団に防水シーツを敷き添い寝（C）、シングル羊毛布団に添い寝（E）、ポリエステルわたベビー布団（F）、セミダブルマットレスと市販のパットシーツ（綿100%、無印良品）（G）と異なる寝具条件であったため、対照としてポリエステルわたベビー布団を用いた（Cを除く）。また、C, Eベビーは機器破損でデータ欠損となった。

【倫理的配慮】乳児の母親に研究目的、方法、いつでも同意撤回できること、同意しなくても不利益がないことを文書と口頭で説明し、文書で同意を得た。本研究は岡山大学大学院倫理委員会の承認を得て行った（No. D05-005）。

【結果・考察】寝床内温度は背部で $34.3 \pm 2.2 \sim 35.5 \pm 70.6^\circ\text{C}$ で、有意差はなかった。寝床内湿度はパシーマ®パットシーツを使用した場合、背部 $72.8 \pm 15\%$ と他条件と比べ低い傾向にあり、防水シーツを使用した場合に比べ背部で、 $85.3 \pm 10\%$ と有意差がみられた。また、アクチグラフの解析結果からサニセーフ®パットシーツを使用した時、睡眠時間が長く、途中覚醒時間が短く、途中覚醒回数が少なかった。

【結論】パシーマ®パットシーツは乳児の寝床内気候と睡眠に対して良い影響が認められた。

本研究は科学研究費基盤研究（C）（平成25～27年度）研究課題名「寝床内気候を整えることは乳児の良好な睡眠に寄与するか」（研究課題番号：25350954）を受け実施した。

使用したパシーマ®パットシーツは龍宮株式会社から供与を受けた。

文献

1) Ikeda RN, Fukai K, Okamoto MK: Infant's bed climate and bedding in the Japanese home. Midwifery 28 (3) 340-347, 2012

O-15 治験コーディネーターの治験実施過程における現状と課題

○井上 弘子, 塩見 和子
新見公立大学看護学部看護学科

【目的】本研究の目的は治験コーディネーター（以下CRC）の治験実施過程における現状と課題を明らかにすることである。

【方法】Web版医学中央雑誌Ver. 5、CiNii Articles、J-STAGEを使用し、過去5年間（2011年～2016年9月）に発表された文献を検索した。キーワードを「CRC」「看護師」として文献を抽出し内容を検討した。

【倫理的配慮】文献中の引用は引用部分を明確にし、著者と区別し明記した。文献を参考にした際には参考文献として書誌情報を明記した。集めた文献、資料、データは研究以外には使用しない事とした。

【結果】

1. 抽出された文献数は計8件数であった。

2. 文献の概要

- 1) 治験の実施経験がある看護師へ治験におけるストレスについてアンケート調査を実施した。結果 「投薬時間」「検体の採取時間」にストレスを感じている事が明らかになった。ストレスを軽減させるものは「CRCの存在」「緊急時のCRCのサポート」「治験用パス」であった。
- 2) CRCの職業的アイデンティティと職業継続性についてアンケート調査した文献は2件あった。結果、半数以上のCRCが仕事に対してやりがいを感じているが、仕事の継続を希望しているCRCは半数以下であった。キャリアパスの不明確と雇用の不安定な状況が職業的アイデンティティの未確立に繋がっていることが裏付けられた。
- 3) 国立大学において治験をリードしていく体制づくりとして、スタッフ教育体制の確立が重要であると述べられていた。
- 4) 地域の中核の大学病院では、小規模病院と連携を取りながら治験を同時進行しており多くの患者に治験を受ける可能性が提供されていた。
- 5) 薬物動態試験の実施項目が多い試験では、通常業務の中で治験を実施する分担当の作成や看護師とCRCの協力体制の充実が円滑な試験の実施に繋がっていた。
- 6) 患者の人権と安全の確保について述べられている文献が2件。リスクを発信し共有するリスクコミュニケーションとインフォームドコンセントの必要性が挙げられていた。また、看護師の資格を持つCRCは、患者への関わりにおいて看護過程を活用して患者の安全保持に繋がるという考え方についても考察されていた。

【考察】2007年厚生労働省・文部科学省は「新しい治験活性化5ヵ年計画」を発表し、各医療機関はその役割や体制づくり、スタッフへの教育などの取り組みを実施した。CRC職業意識としては、業務にはやりがいを感じているものの、キャリアパスや雇用が不明確な事から、将来像が見えず、不安な現状が明確となっていた。患者の人権と安全の確保のために透明性を重視した治験実施や看護師の資格を活かしたかわりが効果的であることも明らかにされていた。治験における課題として、患者の人権と安全を確保し質の高い治験を実施するためにCRCが中心となり、透明性を持った業務の必要性が示唆された。また、CRCのキャリアパスを明確にする事がCRCの安心や成長に繋がっていくものと考ええる。

一般演題（示説）

P-01 日本看護研究学会中国・四国地方会の学会発表の動向(その1)

○福間 美紀¹⁾、津本 優子¹⁾、宮本 まゆみ¹⁾、坂根 可奈子¹⁾、河良 香澄²⁾、内田 宏美¹⁾
島根大学医学部基礎看護学講座¹⁾、島根大学医学系研究科看護学専攻²⁾

【目的】日本看護研究学会中国・四国地方会(地方会)学術集会発表演題の研究分野・研究方法・研究体制の動向を明らかにする。

【方法】分析対象は、第1回(1985年度)～第29回(2015年度)地方会学術集会の抄録集のうち、事務局が保管していた第6回を除く28回分の抄録とした。演題数、著者の所属と構成、研究分野、研究対象、研究方法を分類し、年度ごと、及び、C地区(近畿・四国)(1985-1992年)(以下C地区時代)、近畿・北陸/中国・四国(1993-2002年)(以下広域地区時代)、中国・四国(2003-2015年)(以下中四国時代)の地区割り区分で比較した。

【倫理的配慮】著者の氏名や所属施設名など個人情報や個人の特定につながる情報は一切データ化していない。

【結果】学術集会の総演題数は1,044件であり、C地区時代が58件、広域地区時代が411件、中四国時代が575件であった。会員数に対する演題数の割合は、広域地区時代の年度別平均3.5%から、中四国時代の年度別平均5.2%へと増加した。研究分野別演題数は多い順に「看護教育」354件(33.9%)、「看護技術」106件(10.2%)、「看護管理」(9.6%)で、残る5割弱が臨床看護に関する分野であった。臨床看護に関する分野は「ターミナルケア」「がん看護」「老人看護」「在宅看護」等多岐にわたった。研究分野は、広域地区時代で「看護倫理」「がん看護」「家族看護」「在宅看護」など、中四国時代で「学校保健」の演題が見られるようになった。筆頭著者の推移は、当初短期大学が大半であったものが徐々に減少し、国立大学や私立大学が徐々に増加し、第10回(1995年)で逆転した。著者構成は、単一組織(54.5%)、単独(18.1%)、臨床と教育機関との共同(14.4%)、複数の教育機関の共同(12.5%)であった。研究対象は、看護学生(32.9%)、看護職(22.3%)、患者・クライアント(21.3%)であった。分析方法は、量的分析(59.2%)、質的分析(33.3%)、ミックス法(5.5%)であった。研究対象、分析方法の地区割り区分による変化はなかった。

【考察】地方会開設以降の学術集会発表演題を分析した結果、地区割りの再編成後も演題数が増加し、また、研究分野の多様性も広がっていることが示された。これは、地方会会員が日々の臨床看護や看護教育の実践の中に研究課題を見出し、研究に取り組んでいることが反映された結果と考える。一方、研究分野別の演題数の増減にはばらつきがあり、分野別の十分なエビデンスを提示するには至っていない。また、臨床と教育機関との共同研究が増加する傾向は示されなかった。よって、地方会が地方からの看護学の創世と発信を目指して更に発展するためには、特に臨床看護分野の研究を共同で推進していく必要性が示唆された。

【結論】地方会開設以降の学術集会発表演題を分析した結果、地区割り再編成後も演題数が増加し、また、研究分野の多様性も広がっていることが示された。

P-02 日本看護研究学会中国・四国地方会学術集会発表演題の動向(その2)

○津本 優子¹⁾、福間 美紀¹⁾、宮本 まゆみ¹⁾、坂根 可奈子¹⁾、石倉 綾華²⁾、内田 宏美¹⁾
島根大学医学部看護学科¹⁾、島根大学医学部大学院医学系研究科看護学専攻²⁾

【目的】日本看護研究学会中国・四国地方会(地方会)学術集会発表演題の演題名から研究内容の動向を明らかにする。

【方法】分析対象は、第1回(1985年度)～第29回(2015年度)地方会学術集会の抄録集のうち、事務局が保管していた第6回を除く28回分の抄録とした。抄録より開催回および副題を含む演題名を抽出しデータファイルとした。このファイルを、学術集会の地区割り区分であるC地区(近畿・四国)(1985-1992年)(以下C地区時代)、近畿・北陸/中国・四国(1993-2002年)(以下広域地区時代)、中国・四国(2003-2015年)(以下中四国時代)の3時代に分けて分析した。計量テキスト分析ソフトKH-Coderを用いて抽出頻度の多い語を用いて関連の深さを示す共起ネットワークを作成し、語同士の関連の特徴について3時代の比較を行った。

【倫理的配慮】著者氏名や所属施設名など個人の特定につながる情報は一切データ化していない。

【結果】C地区時代の全58件の演題から抽出した頻度2以上の44語による語のネットワークには、「学生-事例検討-分析-方法」、「患者-パンフレット-効果」、「術後-障害-身体」、「生活習慣-影響」などのつながりがみられた。

同様に広域地区時代の全411件から抽出した頻度5以上の113語によるネットワークには、「学生-実習-指導」、「看護職-意識調査-介護職」、「児-障害-母親-不安」、「看護過程-演習-結果-対象」、「家族-在宅-訪問看護-ケア」、「試み-作成」などのつながりがみられた。

中四国時代の575件から抽出した頻度6以上の116語によるネットワークには、「学ぶ-学生-実習-学」、「高齢-認知症-ストレス」、「家族介護者-介護負担-排尿」、「事例-がん患者-振り返る」、「老年看護学-教育効果」、「分析-用いる」などのつながりがみられた。

【考察】学生に関わる内容を見ると、C地区時代の事例検討の方法や内容の分析から、広域地区時代には実習指導に関わる内容へ、中四国時代には実習で学んだ内容が様々な看護“学”とつながっており、時代を経て専門分化した教育的関わりへと深まりをみせていると推察された。また老年看護学分野の語は広域地区時代まで、家族や在宅ケアなど関連を示唆する一部の用語のみだが、中四国時代になると認知症高齢者や家族介護者の負担、さらに老年看護学の教育効果など様々なつながりをみせており、専門領域としての確立によって研究の幅が広がったことを示している。その他、広域地区時代の研究は「試み」など実践における試行錯誤の結果がみてとれるが、中四国時代では分析の視点が表現されるなど、研究の質も変化していることが示された。

【結論】地方会開設以降の学術集会発表演題名から抽出した語同士の共起関係から、研究内容の深まりや広がり、さらには研究の質の変化などが示された。

P-03 看護職の育児休業取得者に関する研究の動向と課題

○梶谷 麻由子

鳥根県立大学看護学部

【目的】看護職の育児休業取得者に関する研究の動向とキャリア継続に資する研究課題を明らかにすることを目的とする。

【方法】『医中誌Web版(Ver. 5)』を使用し、「育児休業」、「産前産後休暇」、「育児休業」&「復職or職場復帰」、「看護職」&「育児休業」&「復職or職場復帰」、「看護職」&「育児支援」&「ニーズ」をキーワードとし検索した。1992～2016年3月までに報告された会議録を除いた文献のうち研究の目的に合致した42件を分析対象とした。年次推移別、内容別・対象別の研究方法について文献の記述内容を忠実に読みとり分析した。

【結果】研究内容は、「職場環境」「子育て支援」「職場復帰支援」「ワークライフバランス(以下:WLB)」「キャリア継続と子育て」の5つに分けられ、育児に関する法律の制定や改正後に文献数が一時的に増える傾向があった。特に、「職場復帰支援」と「キャリア継続と子育て」は2010年頃から増加していた。最も多かった研究内容は、「職場復帰支援」19件(45.2%)で具体的な内容として、施設独自の研修や復帰支援プログラムの実施と評価が大半であった。「WLB」は8件(19.0%)で、内容はWLBの実践紹介等の事例報告が多かった。以下順に、「キャリア継続と子育て」7件(16.7%)、「子育て支援」5件(11.9%)、「職場環境」3件(7.1%)で、5つの研究内容を分析した結果、量的研究18件(42.9%)、事例報告18件(42.9%)、質的研究6件(14.3%)だった。研究対象は、「育児休業を取得した女性看護職」「育児休業中の女性看護職」「育児休業取得後に復職した女性看護師」「子育て中の女性看護職」「女性看護職」「女性新人保健師」「女性保健師」の7つに分けられ、研究対象を分析した結果、量的研究19件(45.2%)、事例報告18件(42.9%)、質的研究5件(11.9%)だった。

【考察】文献検討の結果、特に「職場復帰支援」と「キャリア継続と子育て」は増加していたことから、育児休業を取得した看護職に対する復帰支援はキャリア継続を視野に入れた取り組みとして注目されていること、「WLB」「子育て支援」「職場環境」に関しては、常に関心の高い研究内容であると推察できる。今後も育児に関する法律の制定や改正に伴った就業に関する実態調査は、育児休業を取得した看護職のみならず、全ての看護職をとりまく就労環境や育児休暇取得から復帰後に続く支援を検討する上で重要な調査になると考える。しかし、「職場復帰支援」に関する調査内容の大半は、施設内での研修の実施と評価の報告にとどまっており、職種や雇用形態による研修内容の比較やキャリアを視野に入れた具体的な取り組みは少ないことが明らかとなった。

【結論】今後の研究では、育児休業を取得した看護職の就業実態を踏まえたキャリアパスモデルの構築に取り組んでいく。そのことが、育児休業からの復帰と看護専門職としてのキャリア継続に寄与できる可能性があると考えられる。

P-04 臨床看護師のリフレクション能力と関連要因に関する研究

○高橋 亜希, 岩佐 幸恵

徳島大学大学院医歯薬学研究部保健科学部門看護学講座

【目的】医療の複雑化著しい現在の臨床では質の高い看護実践が求められている。そのために必要な臨床的知識は単に経験年数をつむだけでは得られず経験の質が問われる。質の高い経験とは経験から学ぼうと省察する力(リフレクション能力)により得た良質な経験である。質の高い実践を行うために必要な経験知の獲得過程において基盤となるものがリフレクション能力であり、それにより批判的思考力を発展させ、看護実践力を獲得し、専門職的自律性、自己効力感を高めると仮説をたてた。本研究はこれら要因の関連を明らかにすることを目的とした。

【方法】本研究は自記式質問紙法の横断型関連検証研究である。対象はA急性期病院に勤務する看護師で管理職は除外した。対象者706名のうち研究の同意を得た263名に質問紙を郵送し4週間以内に返送して貰った。調査期間は2016年7月13日～10月18日とし、調査には職場における経験学習尺度、Rumination-Reflection Questionnaire (RRQ) 日本語版、批判的思考態度尺度、Six Dimension Scale (6DS)、看護専門職における自律性測定尺度、特性的自己効力感尺度、General Self-Efficacy Scale (GSES)等を用いた。分析方法はまず、基本統計量を求め適合度検定を用いデータの正規性を調べた。その後、各尺度間のスピアマン順位相関係数を求めた。

【倫理的配慮】本研究は徳島大学病院臨床研究倫理審査委員会の承認を得た。研究参加者に研究目的、方法、プライバシーの保護、任意参加であり不参加や途中の拒否による不利益は生じないことを説明し研究参加の同意を文書により取得した。個人が特定されないよう質問紙、返信用封筒は無記名とした。

【結果】回収数219、回収率31.0%、有効回答数217、有効回答率30.7%であった。回答者は女性208名(95.9%)、男性9名(4.1%)で、年齢 35.5 ± 8.8 歳(平均±標準偏差)、臨床経験年数 12 ± 8.2 年であった。リフレクション能力を指す経験学習尺度は批判的思考態度尺度、特性的自己効力感尺度、GSES、自律性測定尺度、看護実践力を指す6DSの間に中程度の正の相関を示した($p=.36 \sim .56$)。同じリフレクション能力を評価するRRQは、各尺度間に相関を認めなかった。経験年数はRRQを除く他の尺度間に弱～中程度の相関を認めた($p=.17 \sim .46$)。

【考察】臨床看護師はリフレクション能力のうち内面的自己に注意を向けやすい性質(RRQ)よりも経験学習の実行(職場における経験学習尺度)により、批判的思考力、自己効力感、専門職的自律性及び看護実践力を高めていると推察される。臨床経験の長さは、必ずしも看護の質の高さを意味するわけではないが、経験年数と看護実践力は関連しており、経験の蓄積にはある程度の年数を必要とする。

【結論】臨床看護師は、リフレクション能力のうち経験学習の実行により看護実践力を高めていた。リフレクション能力は、批判的思考力、自己効力感、専門職的自律性を高める。

P-05 看護師の自尊心が認知と気分に与える影響－認知行動理論を用いて－

○江口 実希¹⁾、國方 弘子²⁾

四国大学看護学部看護学科¹⁾、香川県立保健医療大学保健医療学部看護学科²⁾

【目的】人間が物事を判断する価値基準の一つに認知があり、出来事をストレスと受け取るか否かを判断している。認知は気分に影響を与え抑うつ気分の原因となり(江口, 2015)、自尊心は認知に影響を与える(國方, 2013)。そこで本研究では看護師の自尊心が認知と気分に与える影響の強さについて検討する。

【方法】A県の病床数100以上の病院で勤務する看護師1024名に自記式質問紙調査を行い703名から回答を得た。調査内容は、自尊心(自尊感情尺度:10項目1因子)、認知(日本語版自動思考質問紙改訂版:40項目2下位尺度:否定的自動思考、肯定的自動思考)、気分(日本語版POMS:30項目5下位尺度:緊張-不安、抑うつ-落ち込み、怒り-敵意、活気、疲労、混乱)、属性(性別、年齢)とした。分析は回答に欠損のない180名のデータを用いた。自尊心が認知に影響を与え、認知が気分に影響を与える“自尊心、認知、気分の因果モデル”を指定し、データの適合度を共分散構造分析で検討した。パラメータの推定はWLSMVを用い、有意水準5%を統計学的に有意とした。調査期間は2013年2月～7月であった。倫理的配慮:A大学倫理審査委員会の承認を得て実施し、参加の自由、個人情報保護、参加または不参加における不利益の回避に努めた。

結果:女性309名(83.3%)、男性62名(16.7%)、平均年齢41.7歳(SD=10.8)であった。「自尊感情尺度」から「否定的自動思考」に向うパス係数は-.495($P<.000$)、「肯定的自動思考」に向うパス係数は.318($P<.000$)であった。「否定的自動思考」から、POMSの下位尺度「緊張-不安」に向うパス係数は.510($P<.000$)、「抑うつ-落ち込み」は.696($P<.000$)、「怒り-敵意」は.521($P<.000$)、「疲労」は.374($P<.000$)、「混乱」は.588($P<.000$)であった。「肯定的自動思考」からPOMSの下位尺度に向うパス係数は「活気」.625($P<.000$)、「混乱」-.212($P<.000$)であった。なお指定したモデルの適合度はRMSEAが.049、CFIが.940と統計学的に概ね良好な値を示した。気分のうち「不安-緊張」の決定係数は.285、「抑うつ-落ち込み」は.492、「怒り-敵意」は.274、「活気」は.397、「疲労」は.397、「混乱」は.352であった。

【考察】自尊心は「抑うつ-落ち込み」気分に最も強い影響を与えることが示唆された。多様化する医療ニーズに答えていくことが必要とされる看護師は、自分の言動に自信を持ち自己を高く評価する態度である“自尊心”が低下しやすい状況にある。看護師は他職種よりも抑うつ気分が強く、バーンアウトやメンタルヘルス問題を主因とする離職が問題視されており、メンタルヘルスの維持や向上に、自尊心を向上させる効果のある認知行動療法の普及が望まれる。

【結論】看護師の自尊心は認知を経由し気分に影響を与えていた。特に、否定的認知は抑うつ気分にも強く影響を与え、肯定的認知は活気の向上に影響を与えることが示唆された。

P-06 A大学看護学部3年生がキャリア形成のために求めている支援

○塩見 和子、上山 和子

新見公立大学看護学部看護学科

【目的】キャリアは生涯を通じて発達していくものである。看護職を目指している看護大学生が、専門職としてキャリア形成をしていくためにどのような支援を必要としているのか、本研究では講義の演習で取り組んだ内容から、A大学看護学部3年次の学生がキャリア形成のために求めている支援について明らかにした。

【方法】調査対象は、看護生涯教育特論(選択15時間)の講義を受講したA大学看護学部3年生19名。研究期間は、2016年4月開講～同年7月の終講まで。データの収集方法は、全8回の講義の最終講義でグループワークに取り組んだKJ法によるまとめとした。課題は、「看護専門職として成長するためにどのようなサポートがあったら良いと思いますか」。グループ編成は、学生の人数を5名の3グループと4名の1グループとした。倫理的配慮は、学生に研究の目的、個人が特定されないこと、研究の同意は自由意志に基づき同意の有無によって不利益はなく成績には一切関係しないこと、研究結果を公表すること、演習記録をデータとして使用することについて口頭と書面で説明し、同意書の署名と提出によって確認した。A大学研究倫理審査委員会の承認を得て実施した。

【結果】以下、<>をグループ全体の集約、【 】を最終的に集約された島の内容を表す表札、[]を2段階目の表札、< >を最初のラベルとした。最初のラベル数は105、2段階目の表札は35、最終的に集約された島は9であった。各グループの全体の集約は、<ゆとり世代が考える職場環境>、<長く働ける環境と教育>、<ストレスなくキャリアアップ>、<キャリアアップを目指した職場づくり>であった。【看護師を続けるために】は、【休暇】[結婚支援]などのサポート、ならびに【育児支援】として[産休・育休][託児所]を必要としていた。【職場環境】では、【休暇制度の充実】[設備の充実化]などのサポートを必要としていた。【研修】に関しては、【研修制度】[職員との交流][病院見学]についてのサポートを望んでおり、【教育】では、【新人教育】[継続教育]のサポート、【レベルアップ】として【キャリアアップ支援】などが挙がっていた。また、【待遇】では、【平等】と【賃金】への意見があった。【生活】に関しては、【ワークライフバランス】と【休暇】のサポートを望んでいた。【管理】では【ヒアリングの経験について話し合う】などが見られた。

【考察】学生は、看護専門職としてキャリアを積めるように職場における環境や、キャリアアップを目指せる教育の支援、将来を見据えた育児支援、睡眠時間の確保や有意義な休暇の取得など生活の基盤が整えられる支援を必要と考えていた。

【結論】学生はキャリア形成のためには、職場環境と教育、待遇の支援が必要と考えていることが示唆された。

P-07 看護大学生の進路選択動機への影響要因 ～学部4年生の調査から～

○上山 和子¹⁾, 古城 幸子²⁾, 塩見 和子¹⁾, 多田 めぐみ¹⁾, 井上 弘子¹⁾
新見公立大学看護学部看護学科¹⁾, 吉備国際大学保健医療福祉学部看護学科²⁾

【目的】看護系大学生の進路選択は、4年間で様々な体験や出会いを経験し、現実からのフィードバックや社会的要因との妥協・調整を経て進路選択を行っていく。白鳥はこのプロセスを経ないで進路決定した場合は迷いを抱くことになる」と指摘している。古城らは、卒後1年目の新人看護師のキャリアコミットメントの低い人は、入学時の進路決定が十分でないことや、講義や実習体験において動機づけ強化が弱い等の結果を報告している。今回、これから進路選択を具体的にしていこうとする4年生を対象に、看護専門職への動機づけ強化に与える影響要因を分析することで、看護専門職のアイデンティティ確立への看護基礎教育における課題を明らかにする。

【方法】

- 1) 調査対象：大学看護学部4年生、A大学64人、B大学37人の計101人（教育方針が同様な看護系の大学）。
- 2) 調査方法：対象学生に自記式質問紙を配布、回収箱にて回収する。
- 3) 調査機関：2016年6月～7月。
- 4) 調査内容：大学進路選択5類型、看護職イメージ、進路選択への影響要因など。

【倫理的配慮】新見公立大学研究倫理審査委員会の承認を得た（承認番号：113）。対象者には無記名であり匿名性を保持すること、データは統計的に処理、協力は任意でその可否で不利益はないこと、結果は学会等で公表することを口頭と書面で説明し回収箱への投函をもって同意と考えた。進路選択類型使用の承諾を得た。

【結果】調査対象者101人のうち調査協力を得られた91人（回収率90.1%）を分析対象とした。性別は男性12人、女性78人、無回答1人。看護師のみ74人、看護師＋保健師選択17人であった。看護系への進路選択類型は「早期決定型」が40人、「途中変更型」が6人、「直前決定型」が15人、「回避型」が11人、「出会い型」が18人であった。「早期決定型」が44%と約半数を占めた。看護職の動機づけ強化の有無で、「非常にそう思う」「ややそう思う」と肯定的な回答をした学生は、講義の中で「内容」が79人（86.8%）、「教師の熱意」74人（81.3%）、実習で「患者から」88人（96.7%）「看護師から」69人（75.8%）、教師との関わりでは「担任」43人（47.3%）、「研究ゼミ」60人（65.9%）、「実習指導」66人（72.5%）であった。

【考察】対象学生の約4割が小学生くらいから漠然と医療職を考えていた「早期決定型」であった。入学時から動機づけを得ている学生が多かった。しかし、アイデンティティの確立に困難を生じるとされる、決めていた職業から大きな葛藤があったが変更した「途中変更型」、将来ビジョンも明確ではなかったがその時にあった話に乗った「回避型」も2割近い学生がいた。教育の中での動機づけは、実習中の患者への関わりからが最も強く、次に講義での影響が大きかった。実習中の看護師ロールモデルからの影響は、他の要因と比べて高くなかった。

【結論】入学時の進路選択類型を基にした学生指導の必要性が示唆された。

P-08 小児看護学実習における学生の学び－実習施設による違い－

○岡 和子¹⁾, 安福 真弓²⁾
福山平成大学看護学部看護学科¹⁾, 吉備国際大学保健医療福祉学部看護学科²⁾

【目的】小児看護学実習において、施設により学生の学びに違いがあるかを明らかにすることである。

【方法】(1) 対象：E大学看護学科3年生71名（男17・女54）(2) 期間：平成28年2月～10月 (3) 調査内容 ①受持ち患児（年齢・疾患・受持ち期間）②小児看護学実習の感想（外来含）(4) 分析方法：看護学生の学びを3実習施設4病棟（以下A、B、C、Dとする）について実習目標別に内容を分類し、さらに類似したものを集めサブカテゴリーとし、施設による違いを分析した。

【倫理的配慮】研究の目的、個人を特定できないよう配慮、調査に協力しないことによる不利益や、成績に関係しないことを文書と口頭で説明した。また、倫理審査委員会の承認を受けて実施した。

【結果】(1) 受持ち患児の特徴：Aは、呼吸器感染症が大半を占め幼児期が多かった。Bは、造血器腫瘍がほとんどで学童期が多かった。Cは、循環器疾患がほとんどであり、乳児～学童期であった。Dは、呼吸器感染症がほとんどで乳児期～学童期であった。また、A、Dは受持ち期間が3～4日が多く、BCは、8日がほとんどであった。(2) 実習後の学び：「成長発達の理解」は、全施設で「年齢による発達段階」「個別性」「観察の重要性」が抽出された。Bは、「自立への援助」「社会性の育成」、Cは、「入院による発達の遅れ」、Dは、「苦手意識」が抽出された。[小児の心身の健康障害の把握]は、「入院によるストレス」「家族の存在」、BCは、「入院が患児に与える影響」、Bは、「病気の受け止め」が抽出された。[小児に必要な看護技術]は、全施設で「バイタル測定」の困難「観察の必要性」「素早く確実な看護技術」「保護者の協力」、Cは、「最新医療」が抽出された。[日常生活援助]は、ACDで、「家族が実施」BCで、「清潔時の羞恥心への配慮」Aは、「母親から情報を得る」Dは、「素早く実施する」が抽出された。[遊びや学習]と「プレパレーション」は、全施設で「不安やストレスの緩和」「成長を促す」「小児との関係が円滑」が抽出された。[事故防止感染防止]は、全施設で「転倒転落防止」「感染予防」「安全への配慮」が抽出された。[多職種との連携]は、BD施設で、「院内学級の先生」Bは、「保育士」が抽出された。[保護者や家族の心理側面への配慮]は、「保護者に対する支援」が共通で、BCは、「付き添い以外の家族支援」「家族同士の支え合い」Bは、「経済面の不安」が抽出された。

【考察・結論】感想の分析から、実習施設に関わりなく発達段階の理解の重要性など実習目的はほぼ達成されていた。受持ち期間の長短や、患児の年齢、院内学級の有無や保育士の配置など施設の特徴は捉えていた。看護技術は、外来実習を含むことにより治療処置が見学できていた。実習終了後、学びの共有を行い、入院が患児や家族に及ぼす影響や施設の特徴等について補完できると考える。

P-09 海外の看護学領域における成人教育・成人学習の動向

○岡安 誠子, 川瀬 淑子, 平井 由佳
島根県立大学看護学部

【目的】本研究の目的は、海外の看護学領域における成人教育・成人学習の動向を明らかにすることである。

【方法】データベースはCINAHLを用いた。成人教育あるいは成人学習の理論に着目した文献を抽出したかったため、タイトルで“adult education”あるいは“adult learning”を冠し、“learning disabilities”を含まない英語論文を検索した。検索期間は検索可能であった1981年～2015年とした。結果、86件の文献が抽出された。この内、重複した1件、及び学習障害に関する文献を除外した。また、抄録等を確認し明らかに成人教育・成人学習と異なる文献は除外し、最終的に66件を分析対象とした。分析は、検索機関を5年単位で分類し、論文数、“adult education”と“adult learning”別の数と傾向、看護教育と患者教育の別の数と傾向を分析した。また、時系列で並べ内容の変遷について概観した。文献研究における倫理的配慮として、長文の引用は行わず、引用文献など出典の明記などに留意した。

【結果】結果、論文数は1981-1985年9件、1986-1990年16件、1991-1995年5件、1996-2000年15件、2001-2005年5件、2006-2010年7件、2011-2015年9件という結果で、増減を繰り返している状況にあった。“adult education”と“adult learning”の別では、“adult education”が26件、“adult learning”では40件で、徐々に“adult learning”が使われる傾向が多くなっていた。看護教育と患者教育の別では、看護教育が30件、患者教育が20件、どちらとも言えない解説などが16件であった。内容は、1980年は成人教育あるいは成人学習の啓蒙的な内容や看護教育に関連したものが多いが、1990年代からは患者教育への適用が模索され始める。患者教育では糖尿病に関するものが最も多くなっている。2000年以降は、理論によるツールやプログラム開発研究が傾向として多くなっている。

【考察】成人教育・成人学習の起源となるアンドラゴジー“andragogy”という言葉は、1960年末期にKnowlesによって米国にもたらされた。彼がThe Modern practice of adult education (和題：成人教育の現代実践)を著したのは1980年で、その後から代表的なオルタナティブ理論が発展してゆく。このような時代背景を踏まえると、成人教育・成人学習の発展とはほぼ同時期に海外の看護学においては成人教育・成人学習理論が啓蒙されはじめ、看護教育に取り入れられてきたと推察される。看護教育や患者教育への理論適用に向けた取り組みは、現在も続いている。

【結論】海外では成人教育・成人学習理論の発達とはほぼ同時期に看護学における教育への適用が進められており、現在も発展を続けている。

P-10 基礎看護教育における実習用ポートフォリオ導入の試み

○榎本 朋子, 影本 妙子, 池原 麗子
川崎医療短期大学看護科

【目的】実習での学習効果を高めるために、実習に関連する指導や内容を1つのファイルにまとめた実習用ポートフォリオ(以下ポートフォリオ)を導入して教育実践し、その活用の実態をまとめ報告する。

【方法】対象者：A短期大学看護科に平成25年度入学した学生137名で該当年度の実習を履修したもの。期間：平成25年4月～27年11月。方法：①基礎看護学実習Ⅰ・Ⅱ、及び領域実習において開始前にポートフォリオとその活用方法の説明を行った。各実習で目標、反省などを見直し、実習目標を決めた。また領域実習では3領域で開始時に学生と教員で目標を確認し、また最終日に教員と面接した。②全実習終了後に全体を通した学びを個人でまとめた後、グループワークを行い、全体発表会を行った。データ収集方法：3年次11月に質問紙調査を実施した。

【倫理的配慮】ポートフォリオ導入に関しては所属機関の承認を得て行った。調査に関しては目的を口頭と文書で協力の有無や調査内容が成績等に影響しないこと、個人情報保護されることを説明し同意を得た後配布し、一定期間を設けて設置した回収箱への自由投函とした。

【結果】回収率は113名(82.4%)である。実習を通して成長したことの記述内容をカテゴリ化したところ〔看護師としての態度〕〔自分自身をコントロールする力〕〔他者を尊重する気持ちや調整する力〕〔看護の学び〕があり、〔専門職者としての姿勢・態度〕とした。また、〔学習態度や知識の獲得〕〔コミュニケーション能力の向上〕〔看護実践能力の向上〕〔看護技術の向上〕があり、〔看護実践力〕とした。活用状況に関しては定期的に記入や確認が「できた」が18名(15.9%)、「いつもではないができた」が63名(55.8%)、「あまりできなかった」が23名(20.3%)、「できなかった」が9名(8%)であった。できなかった理由として「忘れていて、次の領域実習に進んでさらに忘れた」「忙しかった」があった。活用の工夫は「書くのを忘れるので、領域別の最終週にみんなで書いていたら忘れない」「どの領域でも行うようにする」などがあった。

【考察】ポートフォリオの成果とは明確ではないが実習での成長があった。約3割の学生が定期的に記入や確認ができていない現状も明らかとなった。活用には学習者が自らの動機づけを持つことや指導者からの適切なタイミングでのフィードバックが必須である。加えて全領域での活用を進めていく必要がある。以上から①指導を早期に開始する、②書き方をわかりやすくする、③教員は学生の学びや学習の取り組みをその都度評価する、など5項目の改善点を考察した。

【結論】入院期間の短縮化に伴い、学生が臨地実習でゆっくり患者と向き合い考える時間は少なくなっている。そのような中で教員は卒業までの到達目標に達することができるよう学習への支援・指導していく必要がありより効果的な活用ができるよう進めていきたい。

P-11 看護系大学教員の臨地実習指導能力に関する文献検討

○廣川 恵子, 細川 京子

川崎医療福祉大学医療福祉学部保健看護学科

【目的】看護系大学教員(以下, 大学教員)の臨地実習指導能力に関する研究の傾向と臨地実習指導を行う際に必要な能力を文献から明らかにする。
【方法】医学中央雑誌Web版を用いて, キーワードを「看護」「大学」「臨地実習」「教員」「能力」「力」, 期間を2006年～2016年, 論文種類を原著論文として検索し, 目的に合致する文献を選出した。さらに厚生労働省の報告書等も分析対象とした。対象の文献から研究方法の傾向を明らかにした。さらに大学教員に必要な実習指導能力を抽出し, カテゴリー化した。
【倫理的配慮】対象文献から実習指導能力を抽出する際には論文全体を熟読し, 研究者間で検討を重ね著者の真意から逸脱しないよう配慮した。
【結果・考察】検索の結果, 145件が抽出された。すべてのタイトルと要旨を読み, 大学教員に必要な臨地実習指導能力が読み取れる10件と今後の看護教員のあり方に関する検討会報告書(厚生労働省, 2010)を分析対象とした。
対象論文10件の研究方法は, 文献を分析したもの3件, 教員が記述した記録物を分析したもの3件, 教員に対して行ったインタビュー内容を分析したもの1件, 学生を対象に実施した調査票を分析したもの1件, その他2件であった。1年に2件の論文が発行されていたのは2007年, 2011年, 2016年であり, 他は0～1件だった。大学教員の実習指導能力に焦点を当てた研究は少なく, 研究方法は多岐に渡っていた。
文献研究3件を除く7件から明らかになった臨地実習指導における大学教員に必要な能力として, 「関係性を構築する」, 「教材化する」, 「学生を理解する」, 「看護を実践する」, 「マネジメントする」, 「調整する」という6つのカテゴリーがあった。「関係性を構築する」は, 教員が学生, 患者, 指導者をはじめとする他者と適切に向き合えることができる状態を作る能力を示していた。「教材化する」は, 目の前にある看護現象を教育的な視点で分析することなどの能力を示していた。「学生を理解する」は, 発達段階などを踏まえて学生の特徴を多面的に捉えるなどの能力を示していた。「看護を実践する」は, 教員が自分自身の看護経験や身につけている看護実践力を必要に応じて発揮する能力を示していた。「マネジメントする」は, 学生がその実習において向かうべき方向性を示すことなどの能力を示していた。「調整する」は, 効果的な実習になるよう人的・物理的な環境を整えるなどの能力を示していた。臨地実習指導において大学教員に必要な能力は, 看護実践能力だけではなく看護現象を教育的な視点で捉えて教授する能力, 他者との関係性や環境といった複雑な状況を調整する能力など, バランスよく求められていることが考えられた。
【結論】大学教員の実習指導能力に焦点を当てた研究は少なかった。大学教員に必要な臨地実習指導能力として, 6つの能力が明らかになった。

P-12 看護系大学新人教員の臨地実習指導の特徴に関する文献検討

○細川 京子, 廣川 恵子

川崎医療福祉大学医療福祉学部保健看護学科

【目的】看護系大学新人教員の臨地実習指導における現状と支援の方向性を文献から明らかにする。
【方法】医学中央雑誌Web版により, キーワードを「看護」「大学」「臨地実習」「新人教員」, 期間を2006年～2016年, 論文種類は原著論文にて検索した。目的に合致する文献を選出し, 厚生労働省の報告書等も分析対象とした。論文全体を熟読し臨地実習指導を担当する看護系大学新人教員(以下, 新人教員)に関して明らかにされている内容を抽出した。
【倫理的配慮】研究者間で検討を重ね著者の真意から逸脱しないように配慮した。
【結果】検索の結果, 6件が抽出された。すべてのタイトルと要旨を読み, 新人教員の臨地実習指導に関して述べられている5件と今後の看護教員のあり方に関する検討会報告書(厚生労働省, 2010)を分析対象とした。
新人教員は30歳代が多く, 8割以上が女性, 全体の約5割が修士課程を修了していた。看護実務経験年数は5年以下～20年以上とばらつきがあり, 学生への指導経験は7割だった。約2割は看護職時代の経験領域が一致していない領域の実習指導を担当していた。約3割が実習指導体制や実習上の環境調整などのサポートがないと述べられていた。
実習指導で感じた困難には, 「実習指導に自信がない」, 「学生の未熟さに戸惑う」, 「実習指導体制を調整できない」, 「看護師からプレッシャーを感じる」, 「余裕がなくなる」があった。また臨地実習に関する悩みには, 「関係・調整」, 「実習指導の方法」, 「実習方法」, 「教員としての経験・力不足」, 「実習指導の効果」, 「意に沿わない実習」, 「上司のサポート不足」, 「役割過重」があった。臨床指導者を含む様々な人との関係・調整, 学生と指導者・師長・スタッフとの3者間の関係・調整などに関する悩みがもっとも多かった。
新人教員の実習指導の特徴は, 「看護師としての判断で行動する」, 「学生の言動に注目するが, 思考, 学習プロセスには思い至らない」, 「学生に示した援助や患者の反応について判断の根拠や意味を共有しない」, 「目標が意識にのぼらない」5つが述べられていた。
新人教員の資質の改善・向上のための中心的課題は実習指導能力の向上であった。新人教員の「困難を示す要因」を示すデータの56%が実習に関する困難を表していたこと, 「対処」の有り様の63%が実習への対処を表していた。
【考察】実習指導での新人教員には, 学生とのダイレクトな双方向の教育関係と臨床指導者との安定した関係が求められた。新人教員には, 各々の教育・臨床経験などを考慮した上で, 実習指導を中心とした支援が重要である。
【結論】先行研究5件と厚生労働省の報告書から, 臨地実習指導を担当する新人教員に関する文献検討を行い, 臨床実習での関係性の構築を中心とした支援の方向性が明らかになった。

P-13 大学における非医療系学生と医療系学生の喫煙行動の実態と関連する要因

○冨澤 栄子, 江口 実希, 橋本 茂, 奥田 泰子
四国大学看護学部

【目的】2003年健康増進法が施行され、学校、官公庁施設などの施設管理者は、健康問題の要因である受動喫煙を防止する措置を講ずるよう法制度化された。しかしA大学においては、いまだ全面的な禁煙の環境になっておらず、人々の健康志向の高まる中、そのニーズは満たされていない。そこで本研究では、A大学の敷地内禁煙化に向けての禁煙教育プログラムを構築するための基礎調査として、全学部学生を対象とし非医療系学生と医療系学生の喫煙行動およびその行動に関連する要因の実態を明らかにすることを目的とした。

【方法】平成28年9月～10月、後期オリエンテーション時に自記式質問紙による調査を実施した。調査内容は、基本属性(性別、年齢、学年)、生活環境(世帯構成、両親の喫煙の有無、友人の喫煙の有無)、喫煙行動(喫煙の経験、喫煙開始年齢、1年間の喫煙の経験)、喫煙の意識と知識であった。分析方法は、喫煙行動を従属変数とし、基本属性、生活背景を独立変数とする単回帰分析を行った。さらに喫煙の意識と知識に関して、非医療系学生と医療系学生間の差の検定を行った。倫理的配慮として、研究の目的を説明した上で、協力は自由意思であること、成績等には全く影響しないこと、調査は無記名で行い、プライバシーは厳守することを保障した。調査票は、大学構内に設置した回収箱にて回収した。本研究は、所属大学倫理委員会の承認を経て実施した。

【結果】回答1,693名(回収率86.9%)、有効回答1,684名(有効回答率99.5%)であった。女性1,194名(70.9%)、平均年齢 20.0 ± 1.9 歳、非医療系学生1,433名(85.1%)、家族と同居している学生1,253名(74.4%)、父親喫煙経験有り886名(52.6%)、母親喫煙経験有り287名(17.1%)、友人喫煙経験有り835名(49.6%)であった。喫煙経験有りは、非医療系学生160名(11.2%)、医療系学生13名(6.4%)、そのうち43.3%の学生が常習的に喫煙していた。喫煙開始年齢は、非医療系学生 17.0 ± 4.1 歳、医療系学生 17.3 ± 2.8 歳であった。喫煙の意識に関して、「喫煙は健康に良くない」と答えた学生は、非医療系学生1,093名(76.3%)、医療系学生201名(80.1%)であった。喫煙の知識正答数に関して、非医療系学生 5.9 ± 3.0 、医療系学生 7.0 ± 2.7 であった。喫煙の意識・知識ともに医療系学生が有意に高かった($p < 0.001$)。喫煙経験は、友人の喫煙の有無($\beta = 0.231$, $p < 0.001$)、喫煙の意識($\beta = 0.308$, $p < 0.001$)について関連があった。

【考察】大学生の喫煙行動は、友人など身近な人の喫煙の有無と喫煙の意識に関連があった。喫煙開始年齢が高校から大学入学後であり、喫煙の意識が喫煙行動と関連していたことから、大学入学時から継続的な健康教育、学生を取り巻く環境調整の必要性が示唆された。

【結論】大学生への健康教育は、大学入学時からの禁煙教育に加え、大学内の組織的な啓発活動を行う必要がある。

P-14 モーションセンサを用いた離床兆候キャッチ・システムの開発

○宮本 まゆみ, 坂根 可奈子, 福岡 美紀, 津本 優子, 内田 宏美
島根大学医学部看護学科

【目的】患者の離床による転倒防止策として、臨床では各種離床センサーが導入されている。しかし、いずれも、離床行動を事前にキャッチして転倒を予防するための決め手にはなっていない。そこで、離床センサーの発想を変え、離床の兆候を行動の極早期にキャッチするための、モーションセンサを用いたシステムの開発に取り組んだ。試行段階の本システムの利用可能性を検討することを目的とする。

【方法】本システムは、既製のモーションセンサにパソコンを接続し、画像処理プログラムを追加作成したものである。プログラムは、患者の夜間離床行動を想定し、上半身が一定以上動いたところを捉えて、人と認識した部分を影にするようにした。そしてその瞬間から、人が動いている間の動画が保存されるようにし、人の動きが検知されない間はデータが保存されないようにした。試行実験を行い、検知する体の動き幅を調整した。

【倫理的配慮】本システムは、モーションセンサが人の動きを検知すると人の形が影に変わり、影になった時間のみデータ保存される仕組みになっている。画像から対象者が特定されることはない。試行実験は、研究者自身が被写体となって実施したので倫理的問題はない。尚、臨床での実施を前提として、被験者の研究参加への任意性の保障、及び個人情報保護等の倫理的配慮について島根大学医学部看護研究倫理委員会の承認を受けている。

【結果】試行した結果、赤外線カメラ搭載により、夜間の照明の程度に関係なくデータは記録されていた。パソコン画面に画像が映る際は人物が識別できる状態だが、体を起こす動作があると、その瞬間に人の形が影になった。そして対象者が影にならない場合、保存はされていなかった。この時、パソコンに保存される画像データは影になった時間のみであり、分析する際に対象者の顔はわからなかった。一方、対象者とカメラとの距離が2メートル程度確保されない場合や対象者とカメラの間に障害物がある場合は、対象者が動いても影にならず、データとして保存されていないことがあった。

【考察】夜間、照明がない場合でもデータが取れており、夜間の患者の行動を把握することは可能といえる。また、保存データには、対象者の顔が写らないため、個人情報保護への配慮だけでなく、患者に研究協力を依頼する際に、実際にイメージ画像を提示することで研究協力への抵抗感は少なくなると思われる。しかし、対象者との距離や障害物が課題となることがわかった。最適なカメラの設置位置を検討する必要がある。

【結論】人の動きを認識すると影にして保存するシステムを作成し、試行実験を行った。その結果、画像データ処理および保存は可能であり、対象者の個人情報保護、研究協力への抵抗感の軽減は期待できる。一方、条件によって必要なデータが得られないこともあり、臨床での活用に向けては更なる整備が必要である。

P-15 空気圧式末梢循環促進装置を用いたマッサージの評価に有用な指標の検討

○宇都宮 愛¹, 田村 瑠美¹, 長尾 衣莉¹, 森本 美智子²
岡山大学病院¹, 岡山大学大学院保健学研究科²

【目的】リンパ浮腫は一端発症すると完治は難しく、複合的理学療法や空気圧式末梢循環促進装置：ハドマー[®]などの機器を用いて治療を継続して行う必要がある。しかし、これらの有効性を評価する指標は肢周径以外に一定の見解が得られていない。本研究では、対象者にハドマー[®]を用いたエアマッサージを行い、マッサージの効果の判断に有用な評価指標を検討した。

【方法】40～50歳代の健康な中年期成人女性8名を対象とした。3時間のデスクワークの後、ハドマー[®]によるマッサージを下肢・上肢に30分間行い、負荷前、負荷後、マッサージ後に四肢の周径・皮膚硬度・水分率・皮膚温を測定した。また、四肢の感覚の変化についても質問紙で尋ねた。負荷前の測定値を100%とし、負荷後・マッサージ後の測定値の変化率を表した。マッサージ前後の測定値の比較には、ウィルコクソン検定を、マッサージ後の介入側と非介入側の周径変化率の差の検討には、クラスカル・ワリス検定を用いた。

【倫理的配慮】適格基準・除外基準を記したポスターを掲示してボランティアを募った。協力の申し出があった者に具体的な方法、参加に関する利益・不利益、リスクなどを文書および口頭で説明し、同意書による了承を得た。所属施設の倫理委員会の承認を得て実施した。

【結果】8名中負荷後に周径が増加したのは下肢が7名、上肢1名であった。

マッサージの効果の検討：周径の変化率を求めると、ふくらはぎの周径は、負荷後には両足とも増加し、介入側のみがマッサージ後有意に減少した($p < 0.05$)。

有用な評価指標の探索：ふくらはぎにおいて、皮膚温は周径と関連した推移がみられたが、硬度・水分率には同様の推移を認めなかった。主観的評価でマッサージ前後を比較すると、むくみ・重さを感じる者は減少し、軽さを感じる者が増加した。介入側・非介入側で比較すると、介入側でむくみ・重さを感じる者が少なく、軽さを感じる者が多かった。

【考察】周径の変化率は、ふくらはぎで介入側が非介入側より有意に減少していた。周径の変化量は長谷場の報告とほぼ同様であった。エアマッサージにより末梢の循環状態が改善したことで周径が減少したのではないかと考える。周径以外の指標では、皮膚温が、周径の変動に伴った推移を示していた。皮膚温がリンパ浮腫患者においても同様の推移を示すのか、今後の検討が必要である。また、エアマッサージによって、むくみや重さなどの感覚にも変化が認められ、主観的評価も重要な評価指標になり得るのではないかと考えられた。

【結論】健康な中年期女性を対象として、マッサージによる効果があり、皮膚温には周径の変化に伴った推移があることが示された。また、周径以外に皮膚温や主観的評価も効果を判断する指標として有用であることが示唆された。

P-16 体重管理困難な透析患者の行動変容に向けた看護—トラベルビー看護論を用いて

○河良 香澄¹, 福岡 美紀², 宮本 まゆみ², 小林 裕太²
島根大学医学系研究科看護学専攻¹, 島根大学医学部基礎看護学講座²

【目的】体重管理困難な透析患者の行動変容に向けた看護師の取り組みをトラベルビーの看護理論を用いて分析し、介入を行ったプロセスを報告する。

【方法】対象者は糖尿病性腎症のA氏とその受け持ち看護師Cとした。先に、A氏の現状から看護の課題を検討し、トラベルビーを用いて分析、介入を行った。＜事例の紹介＞A氏60歳女性で、夫と二人暮らし。糖尿病性腎症によって2年前に血液透析が導入となり、現在外来血液透析中。既往歴は慢性腎不全、糖尿病、慢性心不全であった。平均体重増加率は5-10%で経過した。

【倫理的配慮】B病院の看護部長に研究の許可を得た後、A氏に研究の目的、方法、研究協力の任意性、個人情報保護等について、説明し、同意を得た。

【結果】A氏のこれまでの体重管理困難な状況を看護師や医師は、体重増加が多く、水分制限の守れない患者、看護師の指示を守れない患者」と認識されていた。

(1) 初期の出会いの位相：患者は顔を背け、体重増加の話題からすぐに転換するなど「C看護師を他の看護師と同様に体重増加を非難する人」という認識をしていた。C看護師は偏見を持たず「ありのままの患者の姿を見よう」と関わった。(2) 同一性の出現の位相：患者は、自ら体重増加の話題に触れ、反省の思いを伝えるなどC看護師に対して「自己開示」するようになった。C看護師は、A氏が医療従事者からの体重増加の非難にストレスを感じていると理解した。そして、A氏が体重増加や食物について話しても非難せず、受け止めた。A氏は、自身に対して非難をしないC看護師に対して「どうしたら体重減るだろうか」と語り、自己開示するようになった。その後、A氏は脳梗塞で、他院への入院をきっかけに、生活を改める必要があると考えようになった。

【考察】C看護師は、A氏に他の看護師のような偏見や雑念を捨て、その人に向き合おうとする関わりをした。そのことが、A氏自らの口から体重コントロールにつながる体重増加や食物についての自己開示につながったと考える。A氏は、C看護師のラポールの形成につながる人間関係があったため、脳梗塞発症がきっかけとなり、行動変容の意思表示につながったと考える。しかし、A氏のような透析患者の場合、病状や社会背景など様々な影響を受けながら長期の経過をたどり、様々なスタッフと関わることになる。したがって、A氏自らが問題解決に向き合うことができるように看護チームとのラポールに基づいた看護の必要性があると考えた。

【結論】体重管理困難な透析患者の行動変容にその人に向き合うというトラベルビーの人間関係形成は有効であることが明らかとなった。しかし、透析患者は長期間の経過をたどるため、一人の看護師だけでなく看護チームとのラポールに基づいた看護が重要となる。

P-17 我が国におけるクリティカルな状況にある患者の家族ニードに関する文献検討

○大西 敏美, 市原 多香子
香川大学医学部看護学科

【目的】我が国におけるクリティカルな状況にある患者の家族のニードに関する研究の動向を知り、今後の研究課題を明らかにすることを目的とした。

【方法】文献検索は、医学中央雑誌 Web Ver 5.0、CiNiiに掲載されている国内の看護の原著論文を対象とし、「救急」「家族看護」「ニード」「家族アセスメントツール」のキーワードを用いて1980年～2016年の36年間検索した。対象年齢を成人以上とし、重複しているものや、救急・家族看護と関連のない文献は除外し、178件の文献を抽出した。分析方法は、家族に対してどのような研究がされているかの傾向を知るため、織田の研究を参考に6つに分類した。『家族ニード』に関するものを最終分析対象として、掲載年、掲載雑誌、研究対象、研究デザイン、研究目的の視点から分類整理した。

【倫理的配慮】調査対象の文献については、施設名、個人名が特定されないように使用し、著者の真意から逸脱することがないように留意した。

【結果】分析の結果、掲載年は2000年以降に集中しており、特に2004年から急激に増加していた。内容別分類では、【家族看護の現状と認識】が60件(34%)と最も多く、次いで【家族のニード】42件(24%)、【ケア内容】38件(21%)、【家族の実態】28件(16%)、【ツール開発】9件(5%)、【看護師のジレンマ】1件(0%)という順になった。6つの内容別分類から【家族のニード】に関連して抽出された最終文献は42件であった。研究目的からみると、ニードの把握を目的とした研究は約半数を占め、量的研究が多かった。量的研究では、既存の測定ツールを用いる場合と独自に作成したものを用いている場合とがあった。既存の測定ツールで最も多く活用されていたのは山勢らによる、重症・救急患者家族のアセスメントツールであるCNS-FACEが17件(40%)で、2007年以降急増していた。CNS-FACEを導入した効果の文献から、家族のニードを客観的に把握でき、かつ看護介入の方向性について視点をもたらし検討できる有効なツールであった。しかし、必要な介入ポイントを捉えてもそこに介入する確かな方法が見いだせない課題が見出された。次いでMolterの重症患者家族ニードの項目のうち、日本人の文化・習慣などになじまない部分を除いて用いた研究が7件(16%)であった。2006年まではMolterのニードを使用するものが多かった。

【考察】家族のニードに関する研究は、2007年以降、測定ツールを用いて家族のニードを把握している研究が多かった。クリティカルの現場においては、短時間で家族のニードを客観的に把握し、看護介入の方向性について検討できる有効なツールであった。しかし、看護介入の方向性について捉えても、そこに介入する確かな方法が見いだせず、困難を抱えている看護師がいる課題が明らかとなった。この結果から、家族のニードに対する効果的な介入方法のプログラム開発の必要性が示唆された。

P-18 脊髄損傷患者の自己導尿に対する看護に関する文献検討

○深堀 美紀子
広島都市学園大学健康科学部看護学科

【目的】Lapidesらが1972年に神経因性膀胱の排尿管理法として、清潔間欠自己導尿法(以下、CIC)を提唱し、脊髄損傷患者にも用いられている(金城, 2011)。脊髄損傷患者の自己導尿の確立には導入から継続までの看護師の介入が求められている。国内の先行研究から脊髄損傷患者の自己導尿に対する看護の状況と取り組みについての変遷を明らかにすることを目的とする。

【方法】医学中央雑誌Web版を使用し「脊髄損傷」「自己導尿」「看護」のキーワードで検索した69件から会議録、解説/特集、Q&Aを除外し、看護師が研究者であるもの28件を対象とした。対象文献の年次推移を確認し、研究の目的・結果に着目し分析した。本研究は公開された文献を対象にしており、対象者への倫理的問題は存在しないが、著作権に注意を払った。

【結果】対象文献の年次推移は、1978年以降から、1988年1992年2000年を除き、2016年までの各年次で1～3件が発表されていた。1978年の脊髄損傷患者のリハビリテーション看護の役割と清浄自己導尿法を紹介する文献に続き、1980年代には脊髄損傷患者の排尿の自立、自己導尿確立を目的とした導入事例の報告が複数みられる。1990年前後からは、自立に加え障害受容やQOL、使用する物品の工夫、パンフレットに関するものなど多様な内容となっている。2000年前後からCICと間欠的バルンカテーテルの使用に関する事例が複数発表されている。それに応じて、導入時における感染対策や退院後の相談業務に関する研究報告がなされている。また、近年では外来、社会復帰などがテーマになっているもの、その他東日本大震災後の影響に関するものがみられる。

【考察】初期には病棟での間欠自己導尿導入事例の報告がみられている。自己導尿の自立やQOL・障害受容などの観点から看護介入の取り組みがなされている。その後、脊髄損傷患者のセルフケアを拡大するCICと間欠的バルンカテーテル使用の有効性、安全性が報告され、臨床で導入し、患者が退院後に生活場面で実際に直面する手指衛生等のセルフケア、CICに関する患者の受け止め、社会生活上の問題と相談窓口の必要性などが看護研究にも反映されている。近年の在宅への関心の高まりにより、在宅での自己導尿のコストや家族の負担、災害時の影響など脊髄損傷患者の療養場面に即した問題も生じている。また、患者の不安等の精神面への介入についても一層、注目されてきていることがうかがえる。

【結論】脊髄損傷患者の自己導尿の看護に関する文献ではCICや間欠的バルンカテーテル使用に関するものが多く、在宅、社会復帰後に患者が療養場面で直面する問題や患者理解の促進による精神的介入をテーマとするものも発表されている。今後、地域で生活する患者の背景に合わせた介入が求められると考えられる。

P-19 慢性疾患セルフマネジメントプログラムのアクションプラン効果発現メカニズムの検討

○小野 美穂

岡山大学大学院保健学研究科

【目的】本研究は、患者同士のピア・サポート機能を活かした慢性疾患患者のための自己管理支援プログラムである「慢性疾患セルフマネジメントプログラム」(Chronic Disease Self-Management Program: 以下CDSMPと記す)による効果を明らかにし、効果発現メカニズムを検討することである。

【方法】CDSMPを受講し、プログラム進行の認定資格をとり活動中の慢性疾患患者14名を対象に、「CDSMPの効果」をたずねるフォーカスグループインタビューを実施し、インタビュー内容を逐語録として記述しデータとした。まず、テキストマイニング単語頻出分析法(名詞)を用い、CDSMPの効果として頻出する演習項目を探索した。次に、最頻出として挙げた『アクションプラン』演習に関する文節を抽出し、その効果について質的帰納的に分析、アクションプランによる効果発現のメカニズムを検討した。調査時期は、2012年12月である。

【倫理的配慮】対象者には、研究の目的・手順等について文書と口頭で説明し、音声の録音および成果発表についても承諾を得るとともに、一度協力に同意しても自由に撤回し辞退できること、辞退しても不利益を被らないことを説明し同意書への記入をもって同意とした。また、本研究は、A大学倫理委員会の承認を得て実施した。

【結果】質的帰納的分析の結果、効果として、【病気をもつ自己の振り返り】【できることに目が向く】【具体的プランの立案】【成功体験の累積】【言語的説得】【モデリングによる学び】【行動・生活の変化】の7つのカテゴリと14のサブカテゴリが抽出された。

【考察】CDSMP受講者は、ピアによる進行がロールモデルとなり、自己を振り返りやすく、病気を持っているゆえに生じる引け目や追い込まれるような感情が解かれ、病気を持ってもやりたいことをやって良いという安堵感を感じていることが分かった。その後のピアが手本を示すという演習展開が、受講者の具体的なプラン立案を助け、ピアからの励まし加わることでプランが実行できると考えられた。それらが自信や自己効力感向上につながり、さらにこの演習を6週間にわたり毎週繰り返すことによって、実際の生活や行動に変化をもたらすという効果発現メカニズムが示唆された。

【結論】ピア主導を特徴とした慢性疾患患者の自己管理支援プログラムであるCDSMPの演習で最も効果の示された『アクションプラン』について、その効果が明らかになり、効果発現のメカニズムの概要を示した。ピア・サポート機能が有効に作用していることが明らかになり、患者の自己管理を促進するためには、従来の医療者主導の支援プログラムに加え、ピア・サポート機能を有効に活用した支援プログラムに可能性を見出すことができ、今後に期待される。

P-20 集学的治療を受ける乳がん患者の生活の再構築に関する研究

○中垣 和子, 黒田 寿美恵, 船橋 眞子

県立広島大学保健福祉学部看護学科

【目的】文献検討により、集学的治療を受ける乳がん患者の生活の再構築の要素を明らかにする。なお、本研究では「生活の再構築」を「がんの罹患や治療がもたらす生活上の支障に、自分なりに対処することや他者からの支援を得ることや折り合いをつけ、自分らしい新たな生活をつくり上げること」とし、「集学的治療」を「乳房切除術後に行う化学療法およびホルモン療法」と定義する。

【方法】データベースは、医学中央雑誌web(ver. 5)を利用し、検索式:(乳がんand(手術療法or化学療法orホルモン療法or治療)and(生活or困難or対処or適応or経験)), 論文種類:原著論文, 分類:看護, 検索年:2006-2015, として検索し、得られた文献より、生活の再構築についての記述があり、学術論文としての形式が整っている文献を分析対象文献として選定した。分析対象文献に含まれる生活の再構築の要素に関する記述を抽出し、同類性にしながら分類した。

【倫理的配慮】本研究により対象となった文献からの内容抽出の際には、論旨および文脈の意味を損なわないように最大限配慮した。

【結果】検索の結果292文献が得られ、24文献を分析対象文献とした。分析の結果、生活の再構築の要素として＜副作用による苦痛緩和のための予防・対処行動の継続＞＜創部保護や患側上肢の浮腫に対する予防・対処行動の継続＞＜治療に対する前向きな気持ちを保つための試み＞＜家族・近親者のサポートを活用＞＜病気になる前の自分であろうとする試み＞＜自分に必要な情報の収集と選択＞などが得られた。

【考察】集学的治療を受ける乳がん患者は、化学療法やホルモン療法の＜副作用による苦痛緩和のための予防・対処行動の継続＞や手術後の＜創部保護や患側上肢の浮腫に対する予防・対処行動の継続＞をすることで身体を整えるとともに、＜治療に対する前向きな気持ちを保つための試み＞により心身を最善の状態にする取組を行っていた。また、＜家族・近親者のサポートを活用＞のように家庭内での役割移譲や身近な人の支えを得ることで日々の暮らしへの支障や負担を軽減するよう努めていた。そして患者は、常に＜病気になる前の自分であろうとする試み＞や＜自分に必要な情報の収集と選択＞など自分の在りようを模索していた。看護師は、治療による影響とともに患者の生活背景を考慮し、身体的苦痛の緩和やセルフケアに向けた援助、治療経過に即した情報提供を行い、患者が自分らしさを維持しながら治療継続ができるよう支援することが必要である。

【結論】集学的治療を受ける乳がん患者は、同時に複数の治療による副作用の影響に対して多方面への取組を行っている。看護師は、身体的苦痛の緩和、セルフケアへの援助、情報提供などを通して患者が自分らしさを維持できるよう支援することが必要である。

P-21 高齢透析患者が看護師に望むスピリチュアルケア

○小藪 智子¹⁾, 竹田 恵子¹⁾, 白岩 千恵子¹⁾, 實金 栄²⁾, 井上 かおり²⁾
川崎医療福祉大学医療福祉学部保健看護学科¹⁾, 岡山県立大学保健福祉学部看護学科²⁾

【目的】スピリチュアルケアへの示唆を得るために、高齢透析患者が看護師に望むことを明らかにする。

【方法】A県内の3施設で外来透析治療を行っている65歳以上の患者のうち本研究に同意の得られた21名を対象に「高齢者のスピリチュアリティ健康尺度」と「看護師に望むこと」のインタビューを行った。内容は対象者の許可を得てICレコーダーに録音し逐語録としたのちSCAT(大谷2007)で分析した。調査期間は2015年8月～11月であった。なお今回は「看護師に望むこと」の分析結果について報告する。

【倫理的配慮】B大学倫理委員会の承認を得て実施した。

【結果】対象者の属性は男性15名、女性6名、平均年齢77.5±7.0歳、平均透析歴9.0±8.2年であった。以下SCATの理論記述を『』で示す。看護師に望むことを具体的に語ったのは3名のみで『どんな患者にも優しさをもって寄り添い、患者を大切にしたい言葉遣いをしてほしい、謙虚な姿勢で患者の語りから患者の体験を理解してほしい、透析の専門的な知識と技術を深め、些細な変化に気づき、各々の患者にあったアセスメントをしてほしい』と看護師に望んでいた。

残りの18名は望むことはないと答え、その理由により内容が異なったため〈満足している〉13名と〈期待していない〉5名に分けて分析をした。〈満足している〉13名は『看護師の何気ない日常の会話や声掛けから自分を気にかけてくれていると感じ、羞恥心に配慮した排泄ケアなどの心遣い、態度から、自分が大切にされていると感じていた。そして体調不良時の対応や、看護師のお陰で経過がよいといったことから看護師を信頼していた』。〈期待していない〉5名は『透析と体調管理がうまくいくための仕事はしてほしいがそれ以上のことは期待していない。看護師との会話は挨拶程度でよく自分の思いを聞いてほしいとは思わない、話す目的もなく面倒である』と考えていた。

【考察】半数以上の対象者が現状の看護に満足しており望むことは語らなかったが、満足の理由から、患者が大切にされていると思えるような会話や細やかな配慮、態度が求められていた。つまりスピリチュアルケアの中でも、森田らのいう「全般的なケア」が望まれており、看護師もそのニーズに応じていた。一方看護師に思いを聞いてほしいと望まない患者がいることも明らかになった。対象が高齢者であり、看護師の仕事を診療の補助とのみ捉え、看護に対する期待が高くないことが要因と考えられた。

【結論】高齢透析患者が看護師に望むことは、相手に関心を持ち大切にしたい関わりと知識や技術であり、心の奥深い思いを聞いてほしいと望む人は限られていた。スピリチュアルケアを考える際には患者のニーズを捉えることがまずは必要である。

本研究は平成26年度文部科学省科学研究費助成事業(基盤研究(C))「高齢者に対するスピリチュアルケア評価指標の開発」(課題番号:26463478)の助成を受けて実施した

P-22 主な療養施設における看護職員の認知症高齢者に対する転倒予防の過程

○小田 亜希子¹⁾, 小林 幸恵¹⁾, 福岡 美紀²⁾
西九州大学地域看護研究研修センター¹⁾, 島根大学医学部看護学科²⁾

【目的】認知症高齢者の主な療養施設における看護職員の転倒予防の過程について明らかにする。

【方法】＜研究対象＞認知症高齢者が入所する一般病院、特別養護老人ホーム、老人保健施設で3年以上従事する看護職員4名。＜調査方法＞「認知症高齢者との関わりから転倒予測した過程」「転倒予測して転倒しなかった高齢者の状況と予防できた経緯」「認知症高齢者の転倒予測で重要だと思う視点とそれを捉える過程」について聞き取り調査を行った。＜分析方法＞①聞き取り調査から起こした逐語録を作成し、内容を精読した上で切片化した。②切片化した内容に照らしてコード化し、類似した内容をまとめ上位概念となるカテゴリを作成し、カテゴリ間で相互比較を行った。③カテゴリ関連図を作成し、全体像を把握するためのストーリーラインを記述した。

【倫理的配慮】以下の3点について口頭および文書にて説明を行い、同意を得た。(1)同意は任意であり拒否しても個人評価に影響はない。(2)データはID管理で匿名化し、本研究目的以外の使用はしない。(3)データは研究終了後速やかに消去する。(4)研究者の所属機関の倫理委員会の倫理審査を受け、承認を得た。

【結果】データをカテゴリ化した結果、290コード、42カテゴリ、6大カテゴリを抽出した。以下では大カテゴリを<>、カテゴリを<>で示す。転倒予防の過程として、<転倒リスクのアセスメント><転倒の危険因子><転倒予防の対策><スタッフ間での情報共有と意識づけ><看護師としての責務><過去の経験>が抽出された。各大カテゴリを構成する主なカテゴリについては、<転倒リスクのアセスメント>は、<認知機能を査定する><その人が動く理由を考える><その人の行動パターンを掴む><コミュニケーション能力を査定する><転倒リスクが変化する>であった。<転倒の危険因子>は<人的環境因子><物理的環境因子>であり、<転倒予防の対策>は<患者の行動パターンに合わせた関わり><患者の背景をふまえた関わり><本人の欲求を満たす>であった。<スタッフ間での情報共有と意識づけ>は<情報共有の大切さ><気をつける点の周知>、<看護師としての責務>は<患者を尊重した関わり><抑制に対する認識>、<過去の経験>は<転倒事故の経験>であった。

【考察】認知症高齢者の転倒予防の過程では、動く理由や行動パターンを掴むなど、予測できない患者の動きを可能な限り予測することが転倒リスクのアセスメントにおいて重要になると考える。その過程において、看護者は過去の経験を活かし、スタッフ間で情報共有しながら取り組んでいることが明らかになった。

【結論】認知症高齢者の転倒予防の過程は6つの要素で構成され、患者の予測できない行動を可能な限り予測することが重要であり、スタッフ間の情報共有により患者に応じた対応がなされている。

P-23 高齢者の喪失の受容過程について

○中木 里実

関西国際大学保健医療学部看護学科

【目的】超高齢社会となり現代の高齢者は、自分自身の老いとともに心身の機能の喪失や周囲の人の死等数多くの喪失を体験していくこととなる。高橋(2008)は、高齢者は、孤独感、社会的孤立、絶望感がしばしば認められると指摘し、老年期は喪失の世代であると述べている。そこで本研究では、高齢者のこれまでの生涯を振り返った語りの中から喪失に関連した体験について、その時の思い、その後の自分自身の生きるうえでの心構えについて捉え、高齢者の喪失の受容過程について明らかにする。

【方法】四国地方の社会福祉法人施設に紹介を依頼して、候補者の紹介を受けた。対象者の条件として、65歳以上のケアハウスおよびデイサービス通所者で、認知症やせん妄を認めない方とした。Haight et al. (1995)が開発したLife Review and Experiencing Formおよび野村(2009)の日本語版及びBurnsideら(1994)の研究を参考にインタビューガイドを作成した。幼年期、青年期、成人期、老年期の4つに分かれており、各期において心に残っているエピソードおよびそのときの思い等についての質問であった。逐語録を作成し、その語りの中から喪失体験に関する内容を抽出し、質的帰納的に分析した。

【倫理的配慮】対象者に、研究の趣旨、研究協力への自由意思と協力しないことにより何ら不利益を被らないこと、個人情報保護について文書と口頭で説明し、同意書に署名することで同意を確認した。調査は対象施設の倫理審査で承認された後に実施した。

【結果】該当する分析対象者10名に半構造化面接を行った。幼年期から老年期まで4つの時期に分けて尋ねていったが、①愛情・依存の対象を失うこと、②地位・役割を失うこと、③心身の機能を失うことの3種類の喪失体験について語られた。喪失体験に伴う思いと老いへの心構えについて、《後悔》《あきらめ》《覚悟》《過去・現在・未来の喪失を受容》の4つのカテゴリーが抽出された。

【考察】《後悔》から《あきらめ》へ、さらに《覚悟》へと進み最後に《過去・現在・未来の喪失を受容》へと一直線に進んでいくのではなく、再び《後悔》へと戻りながら循環しつつ《あきらめ》や《覚悟》とともに生涯で経験してきた喪失およびこれからも起こりうる喪失を穏やかに受け入れられるようになっていっていることが明らかとなった。

【結論】平山(1995)は、老年期を迎えたら、それまで当然のこととして考えられてきた既存の価値基準の見直しを行う必要性について指摘しているが、老年期の現実に適応しながら生きる知恵を獲得し、喪失に伴う寂しさや不自由さとともに生きる覚悟を定めていると考えられる。本研究では、個別的な老いを最期まで安心して生きていくための老いの生き方についての示唆が得られた。

P-24 自治体が実施する夜間運動教室の参加者特性と参加状況、参加効果からみた評価

○小島 千明, 高嶋 伸子

香川県立保健医療大学保健医療学部看護学科

【目的】A自治体では、夜間運動教室(以下、教室)を開催している。教室の目的は、生活習慣病予防の一環として、夜間に教室を開催することで、働き盛り世代(40～60歳代の就業者)が日常生活に運動を取り入れ、運動を習慣化することができることである。今回、平成27年度教室参加者の特性と参加状況、参加効果を明らかにし、夜間に教室を開催した評価を行うことを目的とした。

【方法】平成27年度教室参加者57名(実人数)に自記式アンケート調査を実施した。内容は、個人属性(年齢、性別、就業有無、教室参加理由)、運動習慣有無(30分以上、週2回以上の運動の1年半継続有無)とした。評価指標は、参加状況(1日の平均参加者数、月別参加者数推移)、体組成測定結果(教室開始時と6か月後の体重、体脂肪率、BMI)とした。分析は、SPSS Ver23を用いて統計量を算出した。また、「就業有」「就業無」の2群で χ^2 独立性の検定を実施し、体組成測定結果は対応のあるt検定を実施した($p < 0.05$)。

【倫理的配慮】研究主旨、研究参加への自由意思と利益、プライバシーの保証、研究データの処理と保管、公表範囲等について文書と口頭にて説明し、同意書により署名を得られた者を対象とした。同意書とともに途中で辞退できるよう同意撤回書を渡した。香川県立保健医療大学倫理審査委員会の承認(165)とA自治体の許可を得て実施した。

【結果】同意が得られた53名(回収率93.0%)を対象に分析を行い、「就業有」22名(41.5%)、「就業無」31名(58.5%)であった。平均年齢は 63.3 ± 8.8 歳であり、「就業無」の60～70歳代が最も多かった。性別は「男性」8名(15.1%)、「女性」45名(84.9%)であった。教室参加理由は「健康づくり」25名(47.2%)が最も多かった。運動習慣有無は、「有り」が22名(41.5%)、「無し」が31名(58.5%)で、「就業有」で有意に運動習慣が無かった($p < 0.02$)。1日の平均参加者数は23.2名で、月別参加者数推移は、年間を通じて「就業無」の参加が多く、特に12月以降は「就業有」の参加が減少していた。体組成測定の分析は、6か月前後のデータがある16名を対象に分析を行い、「就業有」5名(31.2%)、「就業無」11名(68.8%)であった。「就業無」の体脂肪率が増加していた($p < 0.04$)。

【考察】就業時間後に運動教室を開催することで就業者の運動習慣獲得につながることを目的に教室を開催した。しかしながら、教室の対象とする就業者の参加は少なく、夜間でも運動をしに来る健康意識が高い高齢者の参加が多かった。今後は、就業者のニーズを把握した教室の検討が必要である。

【結論】夜間に運動教室を開催したが、自治体が対象とする就業者よりも無就業者の参加が多かった。今後は、就業者のニーズの把握や産業保健師との連携が課題である。

P-25 在宅における老老介護を行っている主介護者の心理的側面とストレス対処能力との関連

○二宮 寿美¹⁾, 小林 敏生²⁾

宇部フロンティア大学人間健康学部看護学科¹⁾, 広島大学大学院医歯薬保健学研究院²⁾

【目的】在宅高齢療養者を介護している高齢介護者の精神健康度、介護負担感、自己効力感、生活満足度の心理的側面とストレス対処能力(以下、SOC)との関連を性別により検討する。

【方法】

1. 対象者：在宅療養をしている高齢者(65歳以上)を半年以上介護している主たる高齢介護者(65歳以上)で、調査の同意が得られた81名。
2. 調査期間：2013年1月～2016年9月。
3. 調査方法及び内容：山口県A・B市及び愛媛県C市にある訪問看護ステーション管理者の同意・協力を得て、対象者宅に研究者1名が訪問し、介護者に質問紙調査を行った。内容は、属性(年齢等)、バーセルインデックス(BI)、心理的側面(精神健康度：CES-D8、介護負担感：J-ZBI、自己効力感：GSES、生活満足度：LSI-K)、SOC等であった。
4. データの分析方法：SPSS21.0を用い、属性及び心理的側面、SOCとの間で χ^2 乗検定及びt検定、ピアソンの積率相関係数を求めた。有意確率は5%未満とした。
5. 倫理的配慮：調査対象者に研究の趣旨と方法を説明の上、研究の参加は自由意志であり、不参加、中断の場合でも不利益を被ることはないこと、またデータは匿名性を守り研究の目的以外には使用しないこと、研究終了後にデータは速やかに破棄することを口頭及び文章で説明し、同意を得た。また、D大学の研究倫理審査委員会の承認(2013010)を得た。

【結果】対象者の概要として介護者の性別は男性22名(27.2%)、女性59名(72.3%)であり、平均年齢は男性75.9±8.1歳、女性76.0±6.3歳で差はなかった。性別の比較では、男性介護者の方が女性介護者よりもCES-D得点が有意に高かった。また、SOC合計点、下位尺度である把握可能感とCES-D、J-ZBIの間に負の相関、処理可能感とLSI-Kの間に正の相関が認められた。女性は、年齢とLSI-K、SOC合計点、下位尺度である処理可能感、意味感とJ-ZBI、CES-Dの間に負の相関、BIとLSI-K、SOCとGSES、LSI-Kの間に正の相関が認められた。

【考察】男性介護者は、責任感が強く、介護を抱え込む傾向があるためCES-D得点が高く精神健康度が低いと考えられる。また、男性は、介護内容をある程度把握できることが介護負担感の軽減に繋がり、精神健康度を高めることが示唆された。一方、女性では、年齢が上がると生活満足度が低下していたが、ADLが高い者は生活満足度が高かった。また、女性は、介護を前向きに捉え、ストレス処理のために介護協力を得られるよう働きかけができることが、介護負担感の軽減に繋がり、精神健康度を高めることが示唆された。

【結論】男性、女性の介護者共に、SOCと介護負担感、精神健康度の間に関連が認められ、女性介護者のみ、SOCと自己効力感、生活満足度の間に関連が認められた。

P-26 高校生のレジリエンスと怒りに対する対処行動の因果の方向性の検討

○石田 実知子¹⁾, 國方 弘子²⁾

岡山県立大学保健福祉学部看護学科¹⁾, 香川県立保健医療大学保健医療学部看護学科²⁾

養護教諭が捉えた高校生の最も重要な健康問題は、情緒的問題や心身症の問題であり、キレる行動や自傷行為といった怒りに伴う攻撃行動である自己破壊的行動が問題となっている。この背後には怒りの感情の存在があり、早急に学校において積極的、意図的な解決の必要性が求められている。このような中、近年、ストレスに対する適応に関わる概念としてレジリエンスが注目されている。しかし、レジリエンスと怒りに対する対処行動との因果の方向性について検討されておらず、心理的ストレスモデル(Lazarus & Folkman 1984)におけるレジリエンスの緩衝効果は明らかとなっていない。そこで本研究では、レジリエンスと怒りに対する対処行動との因果の方向性の検討を行うことを目的とした。

【方法】調査は、2016年4月にA県内の高校共学2校、2年生418名(前年度1年生であった者)を対象に、レジリエンス尺度、高校生アンガーコーピング特性評価尺度を用いた2派のパネル調査を実施した(回収率98.1%)。統計解析には、有効回答票212データ(有効回答率51.7%)を使用し、構造方程式モデリングを用いた交差遅れ効果モデルによる分析を実施した。

【倫理的配慮】調査は、参加の自由、個人情報保護、参加または不参加における不利益の回避に努め、アンケートの回答をもって同意が得られたと判断した。なお本研究は職員会議、保護者ならびに岡山県立大学倫理審査委員会の承認(番号527)を得ている。

【結果】仮定した因果関係モデルのデータへの適合度はCFI=0.910、RMSEA=0.048であった。変数間の関連性に注目すると、レジリエンスと怒りへの対処行動である援護要請、状況分析、逃避、暴力のうち「援護要請」へのパス係数のみ0.238と統計学的に有意な正の関連性が認められた。

【考察】心理的ストレスモデルにおいてレジリエンスは、ストレスを認知した後、怒りへの対処行動である援護要請に影響を及ぼすことが明らかとなった。これは、ソーシャル・サポートはレジリエンスの規定要因であると推察されている(石毛ら、2005)ことから解釈可能である。本研究の結果より、ストレス認知に着目した介入及びレジリエンスを高めることが援護要請に繋がり、高校生の精神的健康の改善に繋がることが示唆された。

【結論】心理的ストレスモデルにおいてレジリエンスは、ストレスを認知した後、怒りへの対処行動である援護要請に影響を及ぼすことが示唆された。

【引用文献】石毛みどり・無藤隆(2005). 中学生における精神的健康とレジリエンスおよびソーシャル・サポートとの関連 - 受験期の学業場面に着目して - 教育心理学研究, 53, 356-367.

* 本研究はJSPS科研費16H07136の助成を受けて実施した一部である。

P-27 高校生のレジリエンスを媒介した対人ストレス・怒りに対する対処行動及び精神的健康の関連

○石田 実知子¹、國方 弘子²

岡山県立大学保健福祉学部看護学科¹、香川県立保健医療大学保健医療学部看護学科²

【目的】近年、青少年の健康に深く関わる攻撃的な行動が顕在化しており、それら行動の発生防止は学校における健康教育や思春期精神医学にとって重要な課題と言える。そのため、逆境にも打ち勝つレジリエンスを高めるとともにストレスへの対処能力を向上させることが喫緊の課題である。本研究では、暴力行動の予防に資することをねらいとして、高校生のレジリエンスを媒介した対人ストレス・怒りに対する対処行動及び精神的健康の関連を明らかにすることを目的とした。

【方法】調査は、A県の高校1～3年生1088名を対象にレジリエンス尺度、対人ストレス尺度、アンガーコーピング特性評価尺度、精神的健康尺度を用いて2016年4月下旬から5月にかけて無記名自記式の質問紙で実施した(回収率96.0%)。統計解析には、有効回答票920データを使用した(有効回答率88.1%)。先行研究であるレジリエンスと対処行動の因果の方向性の研究結果を基に、対人ストレス認知はレジリエンスを媒介し怒りに対する対処行動である援護要請(他者に助けを求めたり、相談すること)に影響すると仮定した。さらに、対人ストレスは、援護要請を通して精神的健康に影響するとともに、直接的に精神的健康に影響するとした因果モデルを作成した。そのモデルの適合性と変数間の関連性について構造方程式モデリングを用いて解析した。なお、上記モデルには統制変数として性別・年齢を投入した。

【倫理的配慮】調査は、所属大学倫理委員会の承認を得て行い参加の自由、個人情報保護の保護、参加または不参加における不利益の回避に努め、アンケートの回答をもって同意が得られたと判断した。

【結果】仮定した因果モデルのデータへの適合度はCFI=0.954, RMSEA=0.051であった。変数間の関連性に注目すると、レジリエンスと対処行動および精神的健康間に統計学的に有意な正の関連性が認められた。また、レジリエンスとストレス認知に有意な負の関連が認められた。なお、統制変数のうち性別は援護要請と有意な関連性が認められた。なお、本分析モデルにおける精神的健康に対する寄与率は31.2%であった。

【考察】対人ストレスが高いほどレジリエンスが低下すること、また、レジリエンスは援護要請を通して精神的健康を高めること、女性は援護要請を高めることが示唆された。このことから高校生の暴力行動の予防に向け、レジリエンス向上に焦点を当てた認知的介入及び性別に配慮した介入が有用であると推察される。

【結論】対人ストレスが高いほどレジリエンスが低下すること、また、レジリエンスは援護要請を通して精神的健康を高めることが推察された。

*本研究はJSPS科研費16H07136の助成を受けて実施した一部である。

P-28 リフレッシュを目的としたイベントに参加した母親の育児ストレスの変化

○横関 恵美子、小川 佳代、高橋 順子

四国大学看護学部

【目的】近年、少子化や核家族化などによって親の育児不安や子ども虐待などが社会問題となっている。そこで、「大学を拠点とした育児支援イベント」に参加した母親の育児ストレスの経時的変化を明らかにした。

【方法】1. 研究協力者：研究者らが企画した2014年度中の育児支援イベントに参加し、参加時(以下、前とする)と1年後(以下、後とする)の調査の協力を同意が得られた母親34名。2. 期間：2014年8月～2015年11月。3. 調査方法及び内容：前と後に同じ内容の無記名の自記式質問紙調査を行った。回収は返信用封筒による投函とした。内容は、(1)属性、(2)リフレッシュの方法(18項目)、(3)育児ストレス(10項目)(4)子育てで困っていることや感じていることについての自由記述であった。(2)(3)は「とても当てはまる」4点～「全く当てはまらない」1点の4段階リカート尺度とした。4. 分析方法：単純集計後(2)(3)について前後の平均値の差の検定を行った。統計ソフトはSPSS Ver 22を用い、有意水準は5%とした。自由記述内容は、意味内容に沿って文節で区切ってコード化しカテゴリ抽出を行い、前後を比較した。

【倫理的配慮】調査の目的、参加の自由意思、拒否しても不利益を被らないこと、プライバシーの保護、調査結果は公表の予定があることを、口頭および文書で説明し同意を得た。事前に研究者所属の倫理審査委員会の承認を得た(承認番号26056)。

【結果】34名のうち28名の協力が得られた(回収率82.4%)。1)母親の平均年齢 34.4 ± 4.1 歳、第1子の平均年齢 4.2 ± 3.1 歳であった。職業有15名(53.6%)、核家族24名(85.7%)であった。リフレッシュの方法について前後の比較をした結果、「テレビ」「インターネット」「雑誌」の3項目に有意差があり、後の方がより多く選択していた。育児ストレスについては前後の有意差はなかった。自由記述の内容は、異なるカテゴリとしては、前には「漠然とした母親の精神的負担感」、後には「父親への不満」があった。「子どもの健康」は前後とも見られたが、後は病気の対応に関するものであった。

【考察】リフレッシュの方法は、自分一人で時間を見つけてできる項目が後で増えており、少しずつ自分のペースで子育てできていると推測できる。しかし前後で育児ストレスの差がないことや記述内容の変化から、不安の内容に変化があると考えられ、状況に合わせた支援が必要である。

【結論】リフレッシュを目的としたイベントに参加した母親の育児ストレスの変化について調査した結果、以下のことがわかった。①リフレッシュの方法として、テレビ、インターネット、雑誌は後のほうがより選択していた。②育児ストレス状況の有意な差はなかった。③自由記述では前が「漠然とした負担感」が見られたが、後は「父親への不満」や「子どもの病気の対応」が見られた。

P-29 熟練訪問看護師が医療的ケア児に行う入浴介助に関する経験知

○枝川 千鶴子, 豊田 ゆかり
愛媛県立医療技術大学保健科学部看護学科

【目的】熟練訪問看護師が医療的ケア児の日常生活を支える関わりの中で、入浴介助の場面における経験知を明らかにすることを目的とする。

【方法】1. 研究デザイン：質的記述的研究。2. 調査期間：平成28年6月～11月。3. 対象：看護師経験年数はおおむね5年以上とし、施設長から推薦を受けた熟練訪問看護師。4. 調査方法：非参加型観察法及び半構成的面接法。5. 調査内容：日常の訪問看護場面における看護行為について観察を行い、子供との関わりの中で実施される看護の実際を、①実施したケア内容の手順や工夫、タイミング、②看護実践を通して知る感覚、③ケアに含まれた判断や意図などについてインタビューにより振り返り、面接内容は許可を得て録音した。6. 分析方法：得られた日常のケア内容の中で、入浴介助を実施した場面に注目した。入浴介助に関する面接内容から逐語録を作成、内容を文脈単位で抽出し内容の類似性からデータをコード化、カテゴリー化した。

【倫理的配慮】本研究は、所属大学の倫理委員会で承認を得たのち、訪問看護ステーション責任者、熟練訪問看護師、訪問先の医療的ケア児の家族に文書と口頭で研究目的・方法、プライバシーの保護・途中辞退の保障、学会での発表等について説明し同意を得た。

【結果】対象となった訪問看護師3名の小児看護経験は7～36年、訪問看護経験は2.5年～7年であった。子供は11ヶ月～7歳の4名で全員が経管栄養・酸素療法・吸引を必要とし、3名が気管切開を行っていた。熟練看護師の経験知は《入浴介助の中で自然に構築されたケアの流れと役割分担の中で無理なく実施する》《入浴で得られる効果が最大限発揮できる手順や物理的環境を整える》《入浴で得られる効果の評価を繰り返しながら身体機能の安定を図る》《自分の五感を通し、子供が表現している身体状況を入浴介助から得る》《母親の入浴実施基準と繰り返しのケアの中で安全な客観的基準の幅を確認しながら実施する》の5カテゴリーが抽出された。

【考察】熟練訪問看護師が行っている入浴介助の経験知は、《入浴介助の中で自然に構築されたケアの流れと役割分担の中で無理なく実施する》とあるように経験の積み重ねの中で子供と家族にあう無理のない実施方法を構築していた。

また、《入浴で得られる効果が最大限発揮できる手順や物理的環境を整える》《入浴で得られる効果の評価を繰り返しながら身体機能の安定を図る》とあるように体調が安定し健康を維持するケアを行っていた。《自分の五感を通し、子供が表現している身体状況を入浴介助から得る》《母親の入浴実施基準と繰り返しのケアの中で安全な客観的基準の幅を確認しながら実施する》とあるように、入浴介助は子供と家族の思いや経験知と看護師としての知識と経験知とを統合したケアを実施していると考えられた。

【結論】熟練訪問看護師が行っている入浴介助について、5カテゴリーの経験知が抽出された。

MEMO

日本看護研究学会中国・四国地方会 第30回学術集会

企画委員・実行委員

実行委員長

深井 喜代子 岡山大学大学院保健学研究科

企画委員

足羽 孝子	岡山大学病院	登喜 和江	千里金蘭大学
新 美保恵	川崎医科大学総合医療センター	徳永 なみじ	愛媛県立医療技術大学
池田 理恵	岡山県立大学	中西 純子	愛媛県立医療技術大学
大倉 美穂	岡山大学	新見 明子	川崎医療短期大学
岡田 淳子	県立広島大学	早瀬 良	中部大学
小野 美穂	岡山大学	肥後 すみ子	群馬県立県民健康科学大学
黒田 裕子	川崎医療短期大学	平松 貴子	川崎医科大学附属病院
近藤 真紀子	岡山大学	廣川 恵子	川崎医療福祉大学
阪本 みどり	川崎医療短期大学	深井 喜代子	岡山大学
佐藤 美恵	岡山県立大学	前川 珠木	岡山大学病院
祖父江 育子	広島大学	松村 千鶴	香川県立保健医療大学
棚崎 由紀子	宇部フロンティア大学	渡邊 都貴子	山陽学園大学

(50音順・敬称略)

実行委員

赤田 いづみ	川崎医療福祉大学	大坂 卓	川崎医療福祉大学
秋元 典子	岡山大学	大室 真由美	川崎医科大学附属病院
揚野 裕紀子	山陽学園大学	岡崎 泉	川崎医科大学附属病院
足羽 孝子	岡山大学病院	岡田 淳子	県立広島大学
阿部 裕美	川崎医療短期大学	岡本 亜紀	岡山大学
生田 由加利	岡山大学	沖中 由美	岡山大学
池田 理恵	岡山県立大学	奥山 真由美	山陽学園大学
伊東 美佐江	川崎医療福祉大学	小野 聡子	川崎医療福祉大学
犬飼 智子	岡山県立大学	小野 美穂	岡山大学
猪下 光	岡山大学	掛田 崇寛	関西福祉大学
内田 陽子	岡山大学病院	神原 幸江	川崎医科大学総合医療センター
内海 知子	香川県立保健医療大学	日下 知子	川崎医療短期大学
大浦 まり子	岡山大学	工藤 節美	山陽学園大学
大倉 美穂	岡山大学		

実行委員

黒田 裕子	川崎医療短期大学	野村 佳代	山陽学園大学
小出 恵子	岡山大学	登喜 和江	千里金蘭大学
古城 幸子	吉備国際大学	林 千加子	川崎医療短期大学
小薮 智子	川崎医療福祉大学	林 由佳	山陽学園大学
近藤 真紀子	岡山大学	早瀬 良	中部大学
阪本 みどり	川崎医療短期大学	原田 延枝	岡山大学病院
佐々木 新介	岡山県立大学	原田 雅義	広島文化学園大学大学院 看護学研究科博士前期課程
佐藤 美恵	岡山県立大学	坂東 多恵子	川崎医科大学附属病院
澤田 由美	山陽学園大学	肥後 すみ子	群馬県立県民健康科学大学
白岩 千恵子	川崎医療福祉大学	兵藤 好美	岡山大学
Su Su Maw	岡山大学大学院保健学研究科 博士課程	平見 有希	岡山大学
曾谷 貴子	川崎医療短期大学	廣川 恵子	川崎医療福祉大学
高嶋 伸子	香川県立保健医療大学	深井 喜代子	岡山大学
高林 範子	岡山県立大学	福武 まゆみ	川崎医療短期大学
竹田 恵子	川崎医療福祉大学	藤井 玲子	岡山大学病院
棚崎 由紀子	宇部フロンティア大学	太湯 好子	吉備国際大学
谷垣 静子	岡山大学	細川 京子	川崎医療福祉大学
塚原 貴子	川崎医療福祉大学	松村 千鶴	香川県立保健医療大学
登喜 玲子	川崎医療短期大学	Mi Mi Thet Mon Win	岡山大学大学院保健学研究科 博士課程
徳永 なみじ	愛媛県立医療技術大学	三村 瞳	岡山大学病院
長崎 恵美子	川崎医療福祉大学	宮川 直也	川崎医療福祉大学
中新 美保子	川崎医療福祉大学	安田 千香	岡山大学大学院保健学研究科 博士課程
中村 朋子	川崎医科大学総合医療センター	山田 隆子	岡山大学
新見 明子	川崎医療短期大学	山本 梨恵	川崎医科大学総合医療センター
西田 真寿美	岡山大学	渡邊 都貴子	山陽学園大学

(50音順・敬称略)

運営協力

株式会社メッド

査読にご協力いただきました日本看護研究学会中国・四国地方会運営委員の皆様
に深謝いたします。

一般社団法人日本看護研究学会
中国・四国地方会
第30回学術集会 協賛／協力企業・団体

敬称略

本学会には、以下の企業・団体様より多大なるご支援を賜りました。
深く感謝いたします。

<巻末広告>

株式会社南江堂
株式会社メヂカルフレンド社
株式会社インテグラル
岡山大学病院
川崎医科大学附属病院
川崎医科大学総合医療センター
西日本メディカルリンク株式会社
パラマウントベッド株式会社
新青山株式会社
株式会社香川サイエンス
宮野医療器株式会社

<展示>

東洋羽毛中国四国販売株式会社
株式会社メルシー
ニプロ株式会社
龍宮株式会社
株式会社神陵文庫

<協賛>

西尾総合印刷株式会社
株式会社メリオ
トラストレイン株式会社

南江堂 好評書のご案内

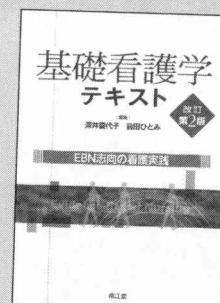
看護学を学ぶうえで欠かせない、基本となるテキスト

基礎看護学テキスト EBN志向の看護実践

編集 深井喜代子／前田ひとみ

研究データに裏付けされた看護実践の実現を目指し、可能な限りの根拠を示しながら基礎看護学の広範で多様な内容をまとめたテキスト。改訂第2版では、新しいエビデンスをもとに全体の記述を見直し、新項目として心肺蘇生の内容を追加した。看護の科学性を希求する志の高い看護学系教員、次代の看護界を支える看護大学生、ケア技術の進歩を希求する看護実践者に必携の書。

B5判・510頁 2015.1. ISBN978-4-524-26656-2 定価(本体5,000円+税)

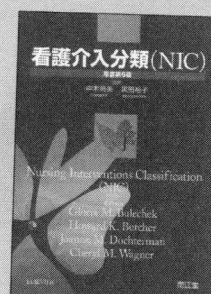


看護介入分類(NIC) (原書第6版)

監修 中木高夫／黒田裕子

『看護介入分類』原書第6版の翻訳。前版より新たに23の介入ラベルが追加、128の介入ラベルについて修正が加えられた最新版。今改訂では、NANDA-Iの看護診断とのリンケージが復活し、さらに使いやすくなった。電子カルテ全盛の今、NANDA-I・NOCと共に欠かせない存在となったNICを学ぶための必携書。

A5判・862頁 2015.7. ISBN978-4-524-26173-4 定価(本体7,500円+税)



イラストの美しさと解剖学的正確さで世界的に定評のある『ネッター解剖学アトラス』の第6版!

ネッター解剖学アトラス (原書第6版)

訳 相磯貞和

学生、研究者からすべての医療従事者に支持される解剖学アトラスの決定版。今改訂では図の追加・入れ替えに加え、各章末に主要な筋の起始・停止などをまとめた表が掲載。こまた、前版で好評であった学習サイトStudent Consult(英語版)も引き続き閲覧可能。

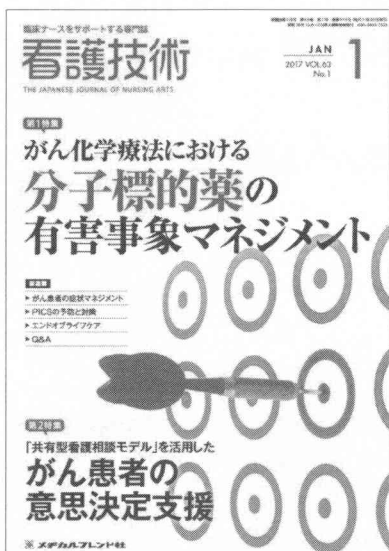
A4変型判・620頁 2016.9. ISBN978-4-524-25967-0 定価(本体10,000円+税)

ネッター解剖学セット版(電子書籍付) アトラス・別冊学習の手引き (原書第6版)

訳 相磯貞和

「ネッター解剖学アトラス」に「別冊の学習の手引き」、さらにこれらの「電子版」をセットにして学習効果を高めた特別版。

A4変型判・830頁 2016.9. ISBN978-4-524-25559-7 定価(本体14,000円+税)



看護技術

THE JAPANESE JOURNAL OF NURSING ARTS

▶ 毎月20日発売

年間購読料	定価 (本体19,200円+税) 【増刊号含む】 ※増刊号は4月・10月の年2回発行です。 定価 (本体14,400円+税) 【通常号のみ】
単月購入時	通常号 定価 (本体1,200円+税) 増刊号 定価 (本体2,400円+税)

- 第1特集** 毎号のテーマを各領域に絞り、最新の知見やエキスパート実践例について、根拠や考え方も踏まえて詳細に解説します。
- 第2特集** 新しいガイドラインの活用法やチームでの独自の取り組み、新しい治療法における看護のポイントなど、第1特集で取り上げた領域の注目トピックについて、その領域の専門家が解説します。
- 連載** 様々な対象へのエンドオブライフケア、がん患者の症状アセスメント、退院支援など、日々の看護に役立てられる内容を取り上げます。

看護展望

The Japanese Journal of Nursing Science

▶ 毎月25日発売

年間購読料	定価 (本体21,800円+税) 【増刊号含む】 ※増刊号は3月・7月の年2回発行です。 定価 (本体16,800円+税) 【通常号のみ】
単月購入時	通常号 定価 (本体1,400円+税) 増刊号 定価 (本体2,500円+税)



- 特集** 毎号30ページ程度にわたり、臨床・教育現場で注目を集めているテーマに迫ります。また、現場から寄せられた最新事例、有識者からの提言、第一人者どうしの対談など、バラエティに富んだラインナップで旬の話題をていねいに解説していきます。
- 連載** 管理者、教育者の“現場”を支えるための充実の連載をラインナップ。それぞれの連載で、現在の看護界を牽引するキーパーソンに登場していただきます。

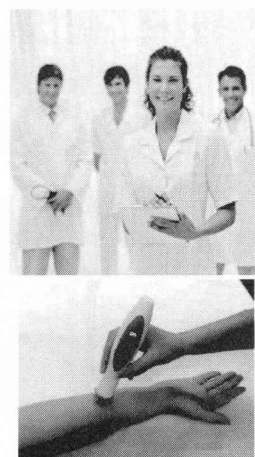
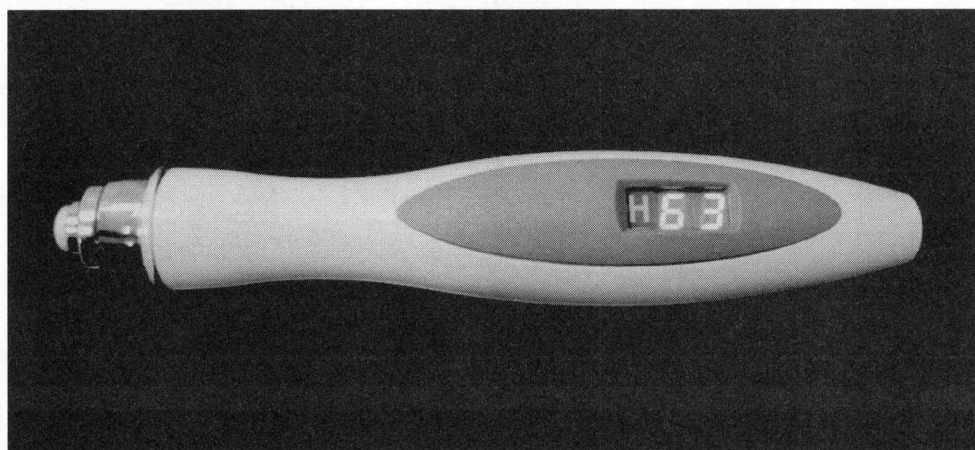
ドイツ Courage+Khazaka 社製

携帯型 皮膚水分計

Mobile Moisture HP10-N

モバイルモイスチャー

ハンディタイプで使い勝手が良く「保健看護学分野」や「皮膚科学分野」におけるスキンケア管理、アセスメントの指標等に変便利な“携帯型皮膚水分計”です



◆特 長

- 国内外で広く使用され、定評のあるドイツ Courage+Khazaka 社製の皮膚水分計 Corneometer (コルネオメーター) の原理を用いた「携帯型水分計」
- WOC ナース (皮膚・排泄ケア認定看護師)、アレルギーエデュケーターによる皮膚水分計測に最適
- 施設で複数本ご購入いただける価格帯

◆適 用

- スキンケア管理や指導、皮膚水分状態のカウンセリングに

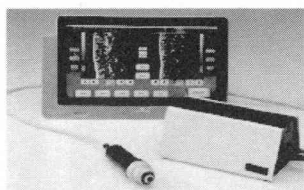
＜インテグラル取扱 研究用皮膚計測機器＞

※国内外で研究論文が多数発表されています

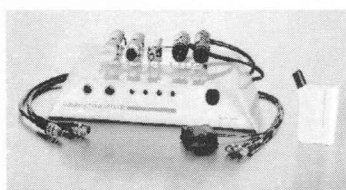
「皮膚水分測定 Corneometer」「pH 測定 Skin-pH-Meter」

「経皮水分蒸散量測定 Tewameter」「メラニン・紅斑測定 Mexameter」

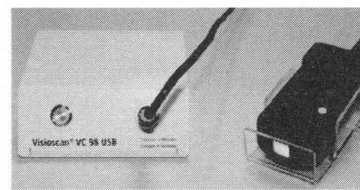
「皮膚粘弾性測定 Cutometer」ほか・・・・・・・・・・ 記載以外にも多数取り揃えております。



超音波皮膚断層画像化装置
DermaLab



マルチ皮膚測定器 MPA シリーズ



2次元皮膚表面キメ解析装置
VisioscanVC98 USB

Integral

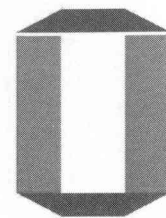
輸入販売元 株式会社インテグラル

〒141-0021 東京都品川区上大崎 2-25-2 TEL:03-6417-0810 F AX:03-6417-0853

<http://www.integral.to> 製品に関するお問合せは Web の「お問い合わせフォーム」よりお願いいたします。

岡山大学病院 看護職員募集

就職説明会・病院見学会開催



OKAYAMA
UNIVERSITY

病院見学会

3月18日(土曜日)

4月 8日(土曜日)



インターンシップ

第1回:3月7日(火)・8日(水)

第2回:3月14日(火)・15日(水)

第3回:3月22日(水)・23日(木)

詳細はHPをご覧ください

採用試験

7月22日(土曜日)



お問合せ先

〒700-8558 岡山市北区鹿田町2-5-1

総務課人事担当 086-235-7518

<http://nurse.hospital.okayama-u.ac.jp/>

採用情報はホームページで随時お知らせします

川崎医科大学附属病院

「すべては
患者さんの
ために」
それが私たちの
思いです



川崎医科大学 総合医療センター

地域住民に信頼され
安全・安心を提供できる病院として
平成28年12月1日開院



看護部理念:看護の対象者と私達が互に了解できる看護を提供します

安心・安全・あったか Kawasaki Nursingu

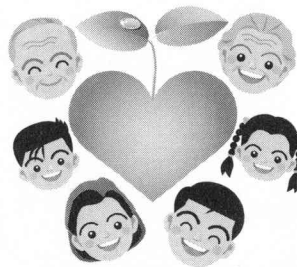
住 所 岡山市北区中山下2丁目6-1

概 要 宅地面積 約12,080㎡ 延床面積 約78,200㎡
地下2階、地上15階 屋上ヘリポート

病床数 647床（緩和ケア18、回復期リハビリテーション病棟54、SCU15
ICU/HCU24 を含む）

手術室 12室 IVR4室

潤いある情(こころ)でお客様のために行動し、
医療環境の向上をお手伝いします。



JM 西日本 **INK** 西日本メディカルリンク株式会社

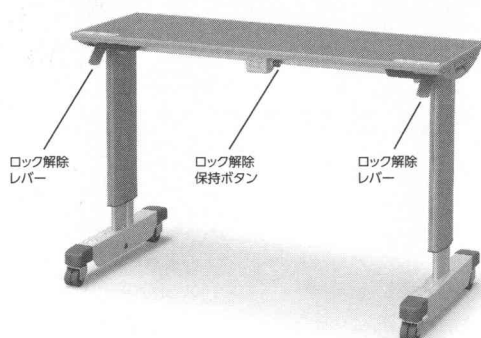
- 本社／〒700-8503 岡山県岡山市南区西市114番地2 TEL(086)241-0231
- 倉敷営業所／〒710-0052 岡山県倉敷市美和1丁目14番39号 TEL(086)426-0222
- 津山営業所／〒708-0842 岡山県津山市河辺717-1 TEL(0868)21-7366
- 福山営業所／〒721-0973 広島県福山市南蔵王町3丁目13番9号 TEL(084)931-4100
- 広島営業所／〒733-0034 広島県広島市西区南観音町21番28号 TEL(082)231-2601
- 三次営業所／〒728-0017 広島県三次市南畑敷町349-4 TEL(0824)64-0170
- 山口営業所／〒755-0039 山口県宇部市東梶返1-10-8 TEL(0836)37-1433

<http://www.jml-west.jp/>

as human, for human
PARAMOUNT BED

より安全に、より便利に使えるオーバーベッドテーブル

テーブルの不意な動きを防止する新しい移動ロック機能を搭載。



移動ロック機能

■ テーブルを常に動かないようにできます。

通常は移動ロック状態です。移動ロック状態ではキャスターをロックしてテーブルの不意な動きを防止します。ロック解除レバーを引き上げている間だけロックが解除され、テーブルを移動することができます。

■ テーブルを常に動くように切り替えられます。

ロック解除レバーを引き上げたままロック解除保持ボタンを押し込むとロック解除状態になります。移動距離が長いときなどに便利です。 ※再度ロック解除レバーを引き上げると移動ロック状態に戻ります。

ガススプリング式高さ調節機能

高さ調節レバーを引き上げてテーブルの高さをお好みの高さに調節できます。高さ調節は左右どちらのレバーでも可能です。

ベッドサイドテーブルをお考えの場合は、当社担当営業にお問い合わせください。

パラマウントベッド株式会社 広島支店 〒733-0011 広島市西区横川町3丁目8番5号 ☎(082)293-1311(代) www.paramount.co.jp

医学・看護教育教材 理化学機器 分析機器 計測機器

新青山株式会社

岡山営業所 〒700-0953 岡山市南区西市 114-8

TEL086-245-4551 FAX086-245-4220

水島営業所 〒712-8061 倉敷市神田 1-2-12

TEL086-446-2411 FAX086-446-2416

URL <http://www.shin-aoyama.co.jp>

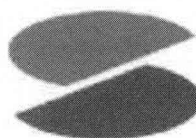
教育と研究のトータルソリューションで看護医療の未来に貢献



フィジカルアセスメントモデル“Physiko”



株式会社 **京都科学** 香川県代理店



株式会社

香川サイエンス

〒760-0080 高松市木太町5099-5

TEL(087)866-6565 FAX(087)866-1313



健康と科学に奉仕する

宮野医療器株式会社

本 社 〒650-8677 神戸市中央区楠町5丁目4-8 ☎(078)371-2121(代表)
大 倉 山 別 館 〒650-8677 神戸市中央区楠町2丁目3-11 ☎(078)371-2121(代表)
M S C 〒650-0047 神戸市中央区港島南町4丁目6-1 ☎(078)302-7001(代表)
ポートアイランド60
MSCウエスト 〒654-0161 神戸市須磨区弥栄台2丁目12-1 ☎(078)797-2072(代表)

神戸西営業所・明石営業所・阪神営業所・中兵庫営業所・姫路営業所・北兵庫営業所
大阪支社・大阪北営業所・大阪中央営業所・大阪東営業所・大阪南営業所
奈良営業所・奈良中和営業所・和歌山営業所・京都営業所・舞鶴出張所
広島営業所・福山営業所・岡山営業所・鳥取営業所・米子営業所・出雲営業所・高松営業所
名古屋営業所・東京営業所・神奈川営業所・鹿児島出張所
モイラン神戸店・モイラン姫路店・モイラン阪神店・モイラン大阪店・モイラン鳥取店

**日本看護研究学会中国・四国地方会
第30回学術集会抄録集**

発 行 平成29年2月

編 集 日本看護研究学会中国・四国地方会
第30回学術集会企画委員会
(代表 深井 喜代子)

〒700-8558 岡山県岡山市北区鹿田町2-5-1
TEL/FAX：086-235-6855

印 刷 株式会社メッド

〒701-0114 岡山県倉敷市松島1075-3
TEL：086-463-5344 FAX：086-463-5345